
木浚塚！恋愛学園

桃内士朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木浚塚！恋愛学園

【Nコード】

N3907C

【作者名】

桃内士朗

【あらすじ】

この小説は作者の都合により更新をやめます。一年後、新しく始めたいと思います。大変ご迷惑をおかけします。

始まりはいつも唐突に

「眠いな」

俺は机に頭を置き、手をだらんとさせていた。

すると机の前に誰か立ったような気がしたが面倒なので無視して寝ようとした。

「授業中に堂々と寝ようとしてるんじゃないぞ」

男の声がしたと思ったら、何か固い物で頭を叩かれた。

「いた」

せつかく寝れそうだったのに頭を叩かれて妨害されてしまい、仕方なく起きることにした。

「やっと起きたな」

俺の机の前に立っていたのは数学担当の山口悟郎先生やまぐち じゅんろうだった。

この教師はなにかと理由をつけて女子の身体を触ろうとするためついた名が痴漢教師である。

「あの問題は寝ていても分かるほどお前にとっては簡単な問題なんだな。ならあれを解いてみる」

山口が指した黒板に書かれた問題が書かれていた。

「え」と、 $X \parallel 3$ と $Y \parallel 6$ ですか？」

「せつ、正解だ」

山口は、まさか俺が正解するとは思ってなかったようだ。

「これぐらいできるからっていい気になるなよ」

山口は捨て台詞を吐いて授業に戻っていった。

やっと4時間目の授業が終わり昼休みになった。

おつ、と紹介が遅れたが俺は名前は森下静間もりした しずま、高校1年生で趣味は特に無い。

一応中2まで卓球はしていたが飽きたのでやめた。
それに弱かったしな。

俺が通っているこの木浚塚高校は、県では結構上で、俺が入れたの

は奇跡に近かった。

中2までの俺の成績ではここに入るとは不可能だっただろう、だが俺はある人がここを受けるといっているので死ぬ気で勉強をしてぎりぎり合格できたのだ。

その反動で高校入ってしばらく寝てばっかだった。

やっと最近授業中寝ないようになったが初めの1週間ずっと寝ていたために先生に目を付けられついる。

さて、俺の紹介はこれぐらいでいいだろう。

さてと、購買にパンでも買いに行くか。

そう思ってたちあがると後ろから声をかけられた。

「よっ 静間、これから飯か？」

後ろに振り返るとそこにはクラスメートであり、悪友の古寺大地こでらだいちが立っていた。

顔はいいが髪形が坊主で性格に少し癖がある男、それがこいつ、古寺大地。

髪を伸ばせば相当もてただろう。

昔大地に、

「髪を伸ばせよ」

と、言ってみたのだが返ってきた答えが、

「坊主は男のロマン！」

などと真顔で言われた。

どんなロマンだと思ったのをよく覚えている。

まあそれも慣れれば気にならなくなる。

だがこいつにかかわると面倒になることが多いからあまり関わりたくないのも確かだ。

「そうだがそれがどうした？」

「どうもしないよ。ただ一緒に食堂で飯を食べようではないか」

大地が何を企んでいるつと俺は直感的にそう思った。

大地がこんな喋り方をするときに限ってなにかが起きるのだ。

「今日はパンだ。だから食堂には一人で行け」

「ふむ、それはすごく残念だ」

大地は言葉どうりすごく残念そうな顔をした。

「せっかく面白いものが見せれたとゆうのに」

やっぱりなにか企んでいたようだ。

「一体何が見れたと言った？」

少し気になったので聞いてみた。

大地が企むことは悪いこともあるがたまに面白いこともあり、聞いてみたくなるのでたちが悪いというかなんというか。

そのせいで気になる。

大地がした高校に入ってしまった一番でかいことは高校の入学式の朝、校庭に机で「大地」という形で置いていたのだ。

そのせいで入学式が遅れかけたのだが大地が何故か持っていたマイクで「犯人は、俺だ！」と、叫んだのだ。

あの時はさすがに驚いた。

後から聞いた話だが、夜中に忍び込んで教室の机を校庭に運び出して、ついでにマイクを拝借してたらしいのだ。

そのことを楽しそうに話していた。

職員室に連れて行かれていたがな。

「おい、自分から聞いてて無視か？」

大地はそういつてため息をついた。

「すまん、もっかい言ってくれ」

やれやれっといったような感じで言った。

「葛原に会えたかもしれないのに」

「そつ、それがどうかしたんだ？」

いきなりここを受けた理由の人を出されて少し動揺してしまった。

「好きじゃないのか？」

大地がにやつきながら聞いてきた。

「そつ、そりゃあ好きだが」

俺はがらにも無く照れながら応えた。

「そりゃそうだろうな。お前は葛原を追ってこの高校に入ったんだ

からな！」

大地は、はっはっはつと、笑いながら言った

「あんまり大きい声で言うな！」

俺は思わず怒鳴ってしまった。

昼休みなので教室には人があまりいなかったようだが、残ってる奴等が俺らを少し見て、また話に戻っていった。

「お前のほうが声でかいぞ」

ニヤついた顔で大地が言った。

「お前のせいだろ」

俺はそれだけ言って席から立ち歩き出した。

「おつ、学食に行くのか？」

大地は言いながら俺の後ろをおつてきた。

「違う、購買だ」

「まあいいや、俺も今日はパンにするか」

「学食じゃないのか？」

「久しぶりにお前と一緒に飯食おうと思ってな」

「そういうば最近一緒に食べてなかったな」

パンを何買うのか話しながら歩いているとすぐに着いた。

昼休みが始まってしばらくたつので、購買ラッシュはおさまっている。

「いいの残ってなさそうだな」

大地がぼやきながらパンを選んでいた。

「そうだな」

残っているのはタマゴサンド、カレーパン、カツサンド、菓子パンとかだった。

大地はすぐさまタマゴサンドとカレーパン、飲み物にレモンティーを買い俺のことを待っていた。

「オバちゃん、メロンパン一つ」

「はい、１３０円だよ」

オレ達は金を渡して、屋上に行く事にした。

「何処で食べる？」

「屋上でよくない？」

大地が聞いてきたので俺は適当に思い浮かんだところを言った。

「寒いけど人があんまりいないくていいな」

「お前が言つとなんか変な意味に聞こえる」

「失礼だな。俺はゲイじゃないぞ」

バカな話をしながら俺らはパンを持って屋上に行くことにした。

まだ冬の寒さの残る屋上は寒かった。

「やつぱりまだ寒いな」

大地が腕を寒そうに摩っていた。

「そりゃ4月だしな」

俺は適当に答えた。

やはり屋上にはあまり人がいなかった。

「おい、あそこにいるのって葛原じゃないのか？」

大地が指を指した方向をみると女子がベンチに一人ぽつんと座っていた。

俺はその女子を目にした瞬間固まってしまった。

「静間、緊張しすぎだ」

俺は大地の呆れた声で我にかえた。

そして、ベンチに座っている女子をよく見た。

確かにそこには葛原零奈がいた。

葛原はいつもど通りの感情の分からない顔で座っている。

「寒くないのかね」

大地が俺に聞いて来た。

「そっだな」

俺は葛原の事を考えて頭がいっぱいで生半可な答えになってしまった。

俺の憧れの人、葛原零奈。

俺がこの高校受けた理由の人。

俺が本気で勉強してギリギリで入れたのに、葛原は首席で入学し、

入学式の時に賞状を貰っていた。

顔は綺麗だが無表情、髪型は紐を一本後ろで束ねているだけだ。スタイルも抜群だが、運動が少し苦手だった。

静かな雰囲気と、無表情な顔のせいで氷の女王と中学の時から氷の女王と呼ばれていたが、この木曽塚高校には中学の時の彼女知る者が少なかったのでよく告白されていたが、全て断ったので1週間もすると誰も告白しようとする者はいなくなった。

中学の時の呼び名が広まり最近は氷の女王と名前が呼ばれるようになった。

「静間、話しかけてみるか？」

大地の一言に俺の顔は真っ赤になった。

「純粹だな」

大地はニヤつきながら言った。

「そつそれよりとつとパン食うぞ」

これ以上は面倒なので話を切り上げるために俺は早口でそれだけ言う

と屋上の出入口横にあるはしごを上った。

上には給水タンクが有る。

「まだ寒いが、ここからの見晴らしはやっぱり最高だな」

俺の後から大地が上って来て言った。

「そつだな」

俺は感情を沈めながら答えた。

大地はさらに給水タンクの上に乗って行った。

「落ちるなよ」

俺はそれだけ言うと言の袋を開いて食べ始めた。

やっぱりパンはメロンパンだないのうちいさむとっと思いつながら食べていると、屋上の出入口が開いて井野内勇に黄泉川留美が腕にしがみつきながら出てきた。

お約束は守らないと（前書き）

「1年1組の森下静間君、1年1組の森下静間君」を「1年A組の森下静間君、1年A組の森下静間君」に修正

お約束は守らないと

勇の身長は180位で、かなりでかいのにたいし、留美の身長は150位でかなり小柄なので、留美は勇にぶら下がってる様になっている。

勇と留美は大地の幼なじだ。

中学の時に大地と一緒に友達になった。

勇と留美はいつも二人で行動している。

いまでは勇と留美は付き合ってるのだが、中学3年まで二人は両思いなのに付き合ってたので、俺と大地でいろいろな手をくして二人をくつつけたのだ。

まあその話は別の機会にしよう。

あれこれ考えてる内に勇と留美がこちらに気がついたようだ。

「大地と静間みっけ！」

元気な声をあげて留美は俺達を指差した。

今日も元気だな〜と俺は思っていると、

「こんな寒い所にお前らよく来るな」

勇がいつの間にはしごを上ったのか横から声をかけて来た。

勇は登つてすぐにポケットに手を入れた。

「いいじゃん、俺達の勝手何だし」

「そうだそうだ、俺達の勝手だ」

俺の言つた後に大地が間延びした声で俺の言葉を繰り返した。

「お前らの勝手で俺達が探し回されたのか」

勇はすこしがっくりした様子で言つた。

「ん？ 何か用事か？」

「ああ、正確に言つと静間、お前に伝言だ」

はて、俺は今週何かしたかな？

俺はそう疑問に思つた。

「誰だ？」

「辻川先生、「とつとと図書室に來い！ 図書委員！」っだそうだ」
勇は声色を真似て言った。

「何！？ もうそんな時間なのか！」

俺は残りのパンを口に放り込み、屋根から飛び降り、

「伝言ありがとな！」

俺は礼を言ってから屋上の出入口から出て、おもいつき走って行った。

「忙しい奴だな」

残った大地達がそう呟いた。

二階まで階段を一気に駆け降り、廊下に出てからさらにスピードを上げた。

突き当たりを一気に曲がろうとした瞬間、不意に角から少女が出て来たので止まろうとしたらワックスが予想以上に塗ってあり、おもいつきり転んでしまった。

「いつて」

「あうっ」

俺は手について立ち上がろうとしたら下から声がした。

何だ？ この床やけに柔らかいな。

俺はそう思っ手て手を動かすと、

「ひゃう」

さらに声がした。

俺は恐る恐るしたを見ると、そこには少女が倒れていた。

俺より20位低いかな？つと、俺は思った。

俺は自分の手の場所を確認すると、手は少女の胸辺りに置かれていた。

「うおお！」

俺は転がるようにして立ち上がった。

結構大きかったなつて、いかんいかん！

その後に少女も立ち上がった。

少女は顔を赤くし、目に涙を溜めていた。

「すつすまん！ 悪かった」

俺は急いで謝った。

「いえ！ 私が悪いんです！」

少女は頭が膝につくんじやないかと思うほど頭を下げた。

健気そうな子だな。

「いや、俺が走ってんだから俺の方が」

とりあえず俺のほうが悪いので謝ろうとしたら。

『ピンポンパンポーン。生徒のお呼び出しです。1年A組の森下静間君、1年A組の森下静間君、今すぐ図書室まで来て下さい。出ないと僕に酷いことがおきますよ！！ ピンポンパンポーン』

俺の言葉が最後まで言う前に俺を呼び出す中野先生の悲惨な叫び声の放送が流れた。

うわ……コレは急いでいかないとやばいな。

「やっべ！ 早く図書室行かないと中野先生が殺される！ この件は俺が全面的に悪かった！ それだけだ！ じゃあな！」

俺は謝ってからまた走りだした。

残された少女は、

「森下……静間……」

つと、俺の名前を呟いていたのだが俺はこの時走っていたので知らない。

「すいません！ 遅れました！」

俺は図書室に着いてからすぐに謝った。

だが、図書室には辻川先生が鬼のような形相で待ち構えていた。

「森下！ お前は図書委員を何だと思ってるんだ！」

図書室に辻川先生の怒声つじかわあけみが響いた。

この先生の名前は辻川朱美先生。

ついでに言うと29歳独身で現在恋人募集中である。
性別は女性。

この辻川先生は、外見はモデル並なのだが、性格が相当悪いので男がなかなか寄って来ない。

しかも先生の理想の恋人は、金持ちで美形と言う凄まじい願望まであるので、寄って来た男はすぐに先生の本性を知り離れていく。

先生は今月で30なので、そうとう焦っている。

そして皆の感想は、

「性格さえ良ければ」

つである。

惜しい人だ。

「まっまあまあ、抑えてくださいよ。辻川先生」

この先生の名前は中野亮先生

なかのりょう

年齢は25歳だが、見た目より少し老けて見られる。

性別は男性。

いつもびくびくというかおどおどしているが、何でも聞いたことは答えてくれる物知りな先生。

この先生は結構人気がある。

理由は、

「後ろから大きな声をかけたら凄くびっくりするからおもしろいだそうだ。

まゝなんだ、生徒の玩具的存在。

……なんだかエロいな。

気にしないでおう。

中野先生がおどおどと辻川先生をなだめる。

「むっ、仕方がない。今日の所は許してやるわ。でも今度また遅刻すれば……」

そこで辻川先生は言葉をきり、図書室から出ようと出口に向かって歩いた。

「つつ辻川先生!? 何をする気ですか!？」

中野先生が聞いた。

「それはしてからのお楽しみだ」

辻川先生は一度振り返りそれだけ言い残すと、本当に図書室を出て行った。

出ていくときさりげなく俺を睨んでいた。

うつ、怖い……

さて、うるさい辻川先生も去った事だし気を取り直して本を読みながら仕事でもするか。

そう思っていると図書室の扉が開いて大地・留美・勇の順で入ってきた。

「仕事してるか」静間

「静間呼び出されてたね」

「せっかく伝言したのに何遅れてんだよ静間」

うるさい先生がいなくなつてやつと静かになったと思ったら、別の意味でうるさい3人組がきた。

勇と留美は大地から離れて本を探すため二人でまわっている。

この学校の図書室はなかなか広く、本の種類も豊富なので、俺はよくここをよく利用する。

そのかわり本の場合を覚えないと、探すのが面倒なのだ。

大地は俺の横の椅子に座った。

「何か面白い事おきないかな」

大地は暇そうに言った。

「おこすのはいつもお前だろ」

「だって考えるの疲れるんだもん」

「語尾にもんを付けていいのはかわいい女子だけだ」

俺は呆れた。

「まっ、これではらくは静かで安心だな」

俺がそう言った直後大地が立ち上がった。

「あっ、そうだ」

何か思い付いたようだ。

嫌な予感がする。

俺に関係がない事を祈ろう。

「静間」

大地が俺を呼んだ。

「なっ、何だよ」

俺を呼ぶ声が真剣なので、俺は身構えた。

「葛原に告白しろ」

え？ こいつ今何言った？ 葛原に告白しろってか？

俺は自分の耳を疑った。

「だから葛原に告白しろって言ってたんだ」

大地がもう一回言ってきた。

ゴンッ

俺はグーで大地の頭を殴った。

「いつてえ」

大地は頭を押さえてうずくまった。

そして立ち上がり、

「何すんだよ」

「お前が変な事言うのが悪い」

「変な事って葛原に告白しろって事がか？ それの何処が変な事っ

てんだ？ クッククッ」

にやつきながら大地が聞いてきた。

「分かって聞いているだろ」

「うん！ 分かってるよ！」

大地は満面の笑みで言い切った。

はあ、こいつと話すの疲れてきた。

図書室にいる生徒達の視線が痛い。

「でっ、告白するのか？」

「するわけねえだろ」

黙らせるためにデコピンをはなった。

「いて」

『キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン』

昼休みの終わりのチャイナがなった。

「さて、図書室から出るか」

俺はさっきの話をなかったことにするために声を出してから席を立って図書室の出口に向かった。

「そだな」

大地も席を立って俺の後についてきた。
作戦成功。

「静間、次の授業って何だっけ？」

歩きながら大地は俺に次の時間割を聞いてきた。

「社会じゃね。まっ、次の授業はサボるからどうでもいいがな」

「社会か！」

大地はもの凄く喜んだ感じに言った。

大地は歴史がかなり好きなので、社会のテストはいつも100点と言う驚異の成績だった。

それ以外のテストの点も70点以上の点数を出しているのが大地のすごい所だ。

「そろそろ走らないと間に合わないんじゃないのか？」

「俺に聞くな。サボるって言ったろうが」

「そうか。じゃ、走るは」

大地はそれだけ言うのと走り出した。

大地が走り去った後、俺は何処に行こうか考えた。

寒いが屋上にでも行くかな。

多分先生もさすがにこんな寒いのに屋上に居るとは思わないだろう。思いたったが吉だな。

俺は屋上に足を向けた。

一応授業中だから教室の前を通るのはまずいよね、だがもう通ったしまあいいか。

俺は最後の階段を上り終わったその時、
ガチャンッ

屋上の出入口が閉まる音が廊下に響いた。

「サボりか？ 悪い奴もいるもんだ」

お前もだろ！ と、突っ込まれるような事を呟きながら俺は出入口を開けて外に出た。

太陽が目に入り眩しかった。

俺は目の上らへんに手をかざした。

「誰です？」

後ろの方から少女の声がした。

振り返ったが、そこには誰もいなかった。

あるのは出入口だけだ。

「上です」

声の言うとおりに上を向くと、そこには着物を着た少女が出入口の屋根に座っていた。

日本人形？

一瞬そんな考えがよぎった。

とりあえず誰でココで何をしているのか聞いてみることにした。

「お前は誰？ 学校で和服着て何をしているんだ？」

「川村郁、明日ここに転校してくるから下見に来たの」

川村郁と名乗った少女は、かわむらがある屋上出入口の屋根から飛んで降りてきた。

タンッ

体重を感じさせない音が鳴った。

「では、私はコレで失礼します」

少女はそう言っでドアを開けて去って行った。

名前教えるの忘れたな。

そう思ったが、すぐにどうでも良くなった。

俺は出入口横のはしごを上った。

さてと、寝るか。

上り終わってから横になって目をつぶった。

『キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン』

チャイムの音で目を覚ました。
いつの間にか眠っていたようだ。
今何時だ？

そう思い俺はポケットから携帯電話を出した。
時間は5時だった。

5時か。

4時間も寝ていたようだ。

通りで空が暗くなり始めているわけか。

「そんな細かいことはいいや、鞆とってとつと帰るか」

細かくは無いだろ！と、突っ込まれそんな事を呟いたが周りに突っ込んでくれる奴がいらないから別にどうでもいい。

教室に向かった。

教室は屋上に通じる階段のすぐ横にある。

なのですぐ着いた。

教室のカギはまだ開いていたので入っていった。

開いていなかったら職員室までとりに行かなくてはいけないので、開いていてよかった。

教室の中は暗くて、少し不気味だった。

俺は早く鞆をとって帰ろうとしたら、

ガタン

何かが動く音がした。

一瞬心臓が止まるかと思った。

ガタン

また何かが動く音がした。

恐怖を押し殺しながら恐る恐る、そちらに向くと、

「わ！」

「ぎょ！」

思わず叫んでその場に座り込んでしまった。

「あはははははは、「ぎょ！」だって！ おもしれ！」
俺を脅かしたのは大地だった。

大地は笑いながら走り去っていった。
追いかけてよと思ったが腰が抜けてしまい立ち上がれない。
殺す……絶対明日で殺してやる……
そう俺は堅く心に決めた。

転校生と双子（前書き）

下手な文章楽しく読んでいただけると嬉しい限りです

転校生と双子

「静間、起きなさい朝だよ」

母さんが部屋までお越しにきた。

無視して寝ようとしたら腹を殴られた。

「~~~~~!」

あまりの痛さにのたうちまわった。

「起きたわね。朝ご飯とお昼ご飯のお金は台所の机の上に置いておくから食べるのよ。じゃあ私行くから鍵閉めといてね」

母さんはそれだけ言々と家から出て仕事に行った。

母さんこと森下咲菜^{もりしたさなこ}は朝の7時30分から仕事に行き、昼に一度帰ってお昼ご飯を食べてからまた仕事行き、夜の8時に晩御飯を作りて深夜0時になって帰って寝れるという超ハードな仕事メニューをこなしているのに、次の日には元気に仕事に行くのだからすごい。そんなに頑張っている理由は俺の通っている高校の学費と、兄が行っている大学の学費を稼ぐために頑張っているのだ。

兄は自分で稼ぐからそんなに無理をしなくていいって言ってるのだがそれでも母は働いている。

ちなみに父さんは俺が2歳の時に別れたと聞いている。

さてと、そろそろ起きて朝飯食わないとやばいな。

部屋を出て台所に向かった

机の上の皿の上には、オーブンで焼かれた食パンと、目玉焼きがあった。

昼飯代はあそこか。

昼飯代は食パンののっている皿の下にあった。

急いで食わないと勇達が迎えに来る。

そう思っていると、

「静間、学校にいくぞ」

勇の声が外から聞こえてきた。

慌てながら目玉焼きを食パンの上にのせて食べる。

目玉焼きが落ちない用に食べながら歩いた。

急いでいたので昼飯代を取ろうとしたら、500円玉だけだと思ったら、消費税分の25円がついていたので散らばってしまった。

しかも母さんは何を考えてか、25円全て1円玉だった。

俺を恨んでいるのか？ 母さん

落ちた1円玉を全て回収するのに3分かかってしまった。

急がなければ留美もきてしまう。

タンツタンツタンツ

誰かが階段を上ってくる音が聞こえてきた。

留美だ！

俺は直感的にそう思ってからすぐ玄関のドアノブを持ち、下駄箱の上につねに置いてある飴玉の入った包みを数個掴んでから玄関のドア開け外に投げた。

すると、

「飴だ〜」

嬉しそうな声が階段に響いた。

留美は甘い物が好きなので、これで少しは時間を稼げるだろう。獲物は餌にかかっている間にしたくをしよう。

俺は部屋に入るとパジャマを脱ぎ捨て壁にかけていた制服を取り、着替えた。

時間にして約1分。

急いでいたのでYシャツのボタンがズレてしまった。

ボタンを直していると、

コンコン

「静間〜、は〜やくで〜てお〜いで〜」

ノックの後に留美が俺を呼ぶ間延びした声が聞こえてきた。

ちっ、もう食べ終わったのか。まあ、もう着替え終わるからいいか。俺が住んでいる所は団地の3階だからあんまり呼ばれると恥ずかし

いのでいつも飴を投げて時間を稼いでいるのだ。

日がたつごとに食べる速度があがってきているのでその分消費量が多い。

そろそろ買い置きが無くなってきたな、今度買っておこう。

そんなことを思いながら俺は学校の用意を終わらせて玄関に向かった。

するとドアの鍵から音がした。

「なっなんだ？ 誰かが何をしているのか？」

まあいいか。

そう思つて鍵を開けようとしたら、

ガチャン

鍵が開いた。

あれ？ なんで鍵が開くんだ？ 母さんはもう仕事に行つたはずだから開けれる奴は誰もいないはずだぞ。

考えていると、

キィィ

「やつぽく静間ちゃん」

ドアが開くと同時に大地が入ってきた

とりあえず大地のみぞおちあたりをおもいつき殴った。

大地は腹を押さえてうずくまったが、すぐに立ち上がり、いつもの調子で話してきた。

「痛てえ、何するんだ」

「昨日の放課後の分だ。それとお前はどうかやってカギを開けた？」

俺は大地に聞いてみた。

「コレで！！」

大地は満面の笑みで針金を出した。

ゴスッ

今度は大地の頭を殴った。

「はっはっはっはっは！！ 静間の家の鍵など針金一本で開けれるは！！」

大地は殴られた頭のことなど無視して、腰に手を当て胸をはって威張っていた。

「威張れることか!!」

俺は大地の腹めがけて殴りにかかったが、大地は紙一重で避け、階段から飛ぶようにして降りていった。

「もうやめて学校に行こうよ、早くしないと遅刻しちゃうよ?」
横から留美の声が聞こえてきた。

大地は既に下まで降りきって、こちらを見て笑っていた。

「先に降りてくれ、勇といたいだろ?」

「うん! じゃ、先に降りてるね!」

留美は笑顔で答えてから、階段を降りていった。

さてと、鍵閉めて俺も行きますか。

鍵を閉めてから階段を下りた。

「静間遅いぞ! 時間がないから今日は自転車の二人乗りな」

勇が指示をだす。

「大地と二人乗りか」

「葛原とがよかったのか?」

大地が俺の一言に反応した。

「殴りたいか?」

「勇、静間が怖いよ」

大地は女言葉で勇の後ろに隠れた。

「時間が無いんだからふざけるなよ」

勇は少し怒りかけている。

携帯を見ると、時間すで8時19分だった。

もうそんな時間か。

高校まで自転車で8分、徒歩では15分位。

8時35分までにつかないと遅刻になるので急がなくては行けないな。

「静間ちゃん早く行くぞ」

「ちゃんをつけるな大地!」

殴ろうかと思っただが、時間が無いので仕方がなく大地が乗っている自転車の後ろに座った。

「それでは、出発！」

大地はスタートと同時に猛スピードで自転車を走らせた。

「ちよっ、おまつ、とばしすぎだ！」

俺は落ちないように必死で大地にしがみついた。

「大地、とばしすぎで静間が失神しかけたぞ」

もうろうとする意識の中、横から勇の声がした。

「たゝのしゝ」

その後に留美の声も聞こえてきた。

留美はすげゝな、このスピードで楽しめるなんて、俺には無理だ。俺はもう気絶寸前だった。

「何！？ 静間が気絶寸前だと！ 仕方が無い」

スピードを落としてくれるのか。

と思ったら、

「スピードをあげるか！」

違った。

「あげるな！！」

最後の力を振り絞り大地の首を締め上げた。

「ぐえっ」

大地はカエルが潰れたような声をだした。

「お前等！ 猛スピードで走る自転車の上で暴れたら」

勇が忠告ようとしたその瞬間、

「うわゝ！」

「うぎゃゝー！」

「事故するぞゝって、もう遅いか」

自転車は前に転がるようにして倒れた。

猛スピードの自転車が縦に転がるようにして倒れたたら普通は死ぬだろうが、奇跡的に静間達は空に放り出され、草むらに落ちた。

「静間！ 大地！ 大丈夫か！」

勇がすぐに引き返して来てた。

「今のは死ぬかと思った。なあ静間」

大地が静間に何か言っているのだが、静間は返事をする事が出来なかった。

「おゝい静間？ 死んだか？」

「大地、しゃれにならんから言うなよ」

「冗談だよ。心臓も動いてたし息もしてたよ」

「そりゃよかった。とりあえず遅刻しそうだから静間を起こすぞ」

大地と勇が静間を起こそうとした時に大地はあることに気がついた。

「あれ？ そういや留美は？」

「ああ、留美か。いまお前等の自転車の回収してる所だと思っぞ」

勇が言った直後に留美が自転車を押して戻って来た。

自転車は前輪と後輪が曲がっていた。

「自転車回収したけどこれって乗れるのかな？」

留美はかわいらしく小首をかしげた。

「留美は可愛いな」

これまで真顔だった勇の表情がいきなり崩れた。

「勇ったらもゝ恥ずかしいよ」

二人はいちやいちやし始めた。

「はあ、勇と留美が自分達の世界に入ってしまったか、こうなるとしばらく回りの事見えなくなるからな。とりあえず静間を起こそう」

大地は誰に言うでも無く呟くと静間を揺すって起こし始めた。

「おゝい静間起きろゝ葛原が見てるぞ」

ピクッ

「おお、葛原の名前に反応するだなんて、なんて単純な男！」

大地がふざけて叫ぶ。

「誰が単純だボケエ！」

叫びながら大地に思い切りアップパーを食らわせた。

「ぐっふう」

クリティカルヒットしたみたいで、動かなくなった。

「おい大地、こんなところで寝てると風邪引くぞ、しかも遅刻するぞ」

だが大地から反応は見取れない。

「まあいいや。どうせすぐ起きるだろう」

「さてと、勇と留美はどうしようか」

二人の世界を壊すと勇が怖いしどうしたものか。

「ほって行こうぜ静間」

大地は復活して、俺の前にいた。

もう復活したか。あのまま遅刻すればよかったのに。

「何か言ったか？」

大地がいきなり聞いてきた。

「何でもない」

声に出して呟いていたようだ。

今度から気をつけよう。

「それよりも勇達ほっていったら遅刻するじゃないか」

「待ってたら俺達が遅刻するぜ」

「それもそうだな。わざわざ勇を怒らせて面倒な事にしたくないしな」

俺と大地はそのまま行こうとしたら、

「あゝんら、友達を遅刻さそうなんて酷い事する子達もいるのね」
後ろから絶対に関わってはいけないと思う声がした。

その声は女見たいな口調、それは良いと思う。

だが、その声は野太かったのだ。

コレは絶対に振り返ってはいけない。

俺は心に誓い前を向いて歩き出した。

あれ？ 大地はどうした？

俺の前にいたはずの大地の姿が消えていた。

「オカマですか？」

後ろからいきなりショッキングな発言が聞こえてきた。

まっ、まさかな……

俺はそう思い恐る恐る振り返ると、大地が大男の前にいた。服装はこの高校の制服を着ているのでさらに不気味だった。

男は見た感じ20歳位だろう、身長は2メートルくらいあるかもしれない。

大地は185cm位だが、男はその大地より頭1個分以上でかかった。

「おほほほ、オカマって誰のことかしらね」

男は怒りを隠した様な声で言った。

「あな」

大地が口を開いた瞬間に俺は大地に回し蹴りをし口を封じた。

「あなたはココで何をしているのですか？ この先は高校で関係者以外は立ち入り禁止ですよ」

俺は大地に回し蹴りをしたことを無かったかのように丁寧に質問をした。

男は少し啞然としていたがすぐに答えが帰ってきた。

「私はこの先の木浚塚高校の2-Cに転入する事になりました川村翔流と申しますわ」

この才力……もとい川村翔流はこの身長で高2と言っている事に驚きを隠せなかった。

いや、まあ制服を着てるから薄々そうではないかとは思っていたがまさか本当とは思わなかった。

そういえば川村って名前どこかで聞いた気がするんだがな。

まあ気にしないでおこう。

それよりも、

「そ、そうですか。ではそろそろ時間が危ないので失礼します」

俺はさっさとこの場から離れたいためにそう言った。

嘘は言っていないからいいだろう。

俺はそう思い回れ右をして去ろうとしたら、

「ああ！ そうだったわ私も急がないと！！ 転校初日に遅刻なん

て見つとも無いわ！」

川村は叫びながら走っていった。

その速度は凄かった。

なんていうかあの巨体に似合わない速度で走っていった。

あれは人間じゃないな。今度から関わらないようにしよう。

俺は心に硬く決意し、ふとあることに気が付いた。

大地と勇と留美は何処だ？

俺は辺りを見たがそれらしい姿は見つけられなかった。

そして少し先の道を見る。

それ以前に俺以外この辺には誰もいなかった。

いない、……まさか置いて行かれたか？ でもあいつらに限ってそ

んなことするはずは……あるな。

特に大地あたりがしそうだ。

とりあえず携帯のディスプレイを見る。

8時30分……やべえな、走らないと間に合わねな。

ココから普通に歩いて8分、走って大体3分くらいだ。

別にいいか、走るの面倒だし。

俺は諦めて歩き出した。

後ろから二つの声をかけられた。

「やつほー！ 静間ちゃんおはよう！ 歩いてると遅刻するよー」

「おはようございます静間さん」

片方は元気に、もう片方は静かに挨拶をしてきた。

俺にちゃんをつけて呼ぶのはこの世に2人しかいない。

そう思いながら振り返り挨拶した。

「おはようさん。俺を呼ぶ時にちゃんを付けるなと何回言ったらわかるんだ？」

やはりそこには想像した奴らがいた。

「いいじゃないか！ 私らの仲なんだし！」

「どんな仲だよ。まだ会って2ヶ月もたってないし」

こいつと話すと疲れる。

この明るい奴の名前は紅牡里南菜深。^{くはむらとななみ}

年は15歳。

性格は明るく元気で手先は器用な何処にでもいる女の子のようであり、違った。

その理由は……後から勝手に分かるからそれまでおいておこう。

「静間さん、どうかしましたか？」

心配そうに話かけて来たのは紅牡里美佐希。^{くはむらみさき}

名前で分かると思うが南菜深と姉妹だ。

まあ姉妹と言っても双子なのであまり関係ない。

性格はいつも冷静で何事にも動じない。

南菜深とは真逆だ。

「なんでもない。南菜深と話してたら疲れたただけだ。それにしても珍しいな、お前らがこんな時間に登校なんて」

「姉様がなかなか起きないために冷水をかけたら風邪ひくって言いました。お風呂に入りました。それが少し長引いてしまったのです」
「美佐希ちゃんひどいの。起きないからって冷水かけるんだよ」
言っておくが美佐希の方が後に産まれたので妹である。

自業自得のようだ。

「時間の方が危ないのでそろそろ急ぎます。静間さんも急いだ方がいいですよ？」

美佐希はそれだけ言うと走って行った。

「まってよ」美佐希ちゃん

その後を南菜深が追いかけていった。

一時間目は嫌いな英語だし遅刻してもいいか。そう思いながら学校に向かった。

坂道の途中で学校のチャイムが聞こえてきた。

転校生と双子（後書き）

しばらく新しいキャラを出しますんでその辺は気にしないでくださいな

ヤンキーと風紀委員と遅刻魔（前書き）

恋愛要素が今のところない恋愛小説です（あ
では、楽しんでくださいね）

ヤンキーと風紀委員と遅刻魔

やっと着いた。

学校の門の前で携帯を取り出して開き、ディスプレイに映る時間を見た。

9時20分と表示されている。

のんびり歩きすぎたかな？ まあいいや。そろそろ授業も終わるし学校に入るか。

門は閉まっているので乗り越える事にする。

門の高さは3m、素材は石、足をかける所など何処にもない。普通に越えようとしても無理だろう。

「普通には無理だけど、抜け道があるだよね」

俺は呟きながら門の左側に回った。

門の左側は金網でできていた。これなら足をかけるところもある。

しかも高さは2mもない。

ちゃっちゃと登るか。

俺の慎重は大体175cm、手を伸ばせば一番上まで届くので登るのは楽だ。後は腕を曲げながら金網に足の穴に足のつま先をいれて登るだけでいいのだから。

一番上まで行けば後は簡単、飛んで降りればいいのだ。

「こらー！ そんなところよじ登ってるんじゃないよ！」

下からりんとした声が聞こえてきた。

面倒な奴に見つかってしまったような。

下を見ると女子が立っていた。

やはり面倒な奴だった。

奴の名前は鈴原舞。すずはらまい

「遅刻してるからってそんなところ登るんじゃない！ 遅刻手続きしなさい！」

舞は俺の左足を掴んで来た。

身長は170cmなので俺の足を掴むのは余裕である。

そしていつも心の中で思うのが、この学校の奴ら身長高い奴多いな
〜っと、だがそんなこと考えてる暇は今はない。

「ちよつ、おまつ、足から手を離せ！ 落ちる！」

必死に叫んでいるが舞は足から手を離す気はない様だ。

「あなたがそこから降りるのなら離してあげます」

「お前は風紀委員か！」

叫んだ直後、体が後ろに大きく傾いた。

「あ」

落ちたな。

と、思い目を閉じていたのだが地面に落ちる気配が全くない。

だが背中に何かが当たっている感触はする。

もう落ちたのか？ 地面つて案外近いな〜ってそんなわけないか。

意を決して目を開け、首を後ろに回すと、そこに俺のよく知る男が
いた。

彼の名前は水鏡麗。みかがみれい

この学校の番長である。

中学の時一緒なので友達だ。

身長は180cm。

髪型はリーゼント。

服装は長ラン。

いつの時代の不良だ！ っと言われるがそんなに悪い奴ではない。

まあ番長と言われるほどなので喧嘩は強いみたいだ。

みたいだと、言うのは今まで誰も麗の喧嘩を見たことがない。

しかも噂すらない。

一応喧嘩を売られている所を見たことがあるが、相手は何もせず
に去っていく。

そりゃここが一応名門高校で喧嘩をすれば停学、もしくは退学と言
う思い罰もあるが、多分一番の理由が目だ。

麗の目は垂れている。

目付きが悪いのではなく垂れているのだ。

目が垂れているのもものすごく可愛い顔になっている。

どれくらいかわいいかと言うと、「どうするア フル〜」に出てくる犬並に可愛い。

そのおかげで今まで喧嘩の話を聞いたことがない。

中学までは普通だったのだが一体麗の身に何が起きたのやら見当も付かない。

「そろそろ手を下げたいんだがいいか？ 手が疲れてきちゃった」昔から不良言葉と敬語が混じっているのはスルーしておいてくれ。

「ああ、すまん」

俺はバランスをとり金網に戻った。

「お前ら、そんなところであばれてつとけがすっぞ」

「その風紀委員まがい奴のせいだよ」

「誰が風紀委員まがいですって！」

「暴れるとまたおちるぞ」

『キ〜ンコ〜ンカ〜ンコ〜ン キ〜ンコ〜ンカ〜ンコ〜ン』

一時間目終了のチャイムが聞こえてきた。

「そういえば風紀委員まがい、遅刻してるけどいいのか？」

「わっ、私はいいのよ！ ちゃんと連絡したから！」

「ふ〜ん、そうか」

俺はそれだけ聞くと金網から飛び降り、校舎へと向かった。

「あつ、こら待ちなさい！」

後ろからうるさい声が聞こえるが無視していこう。

下駄箱で靴を履き替えてさっさと教室に向かう事にした。

職員室に行つて来た事報告しようかと思ったがめんどくさいのでやめた。

とりあえず教室に行つて大地を殴ろう。

あいつ、俺を置いてよくも先に行きやがって。

ぶつぶつ呟きながら歩いてると前に少女が立ちふさがった。

「おはようございます森下様。昨日はどうもです」

少女は丁寧にお辞儀をしてきた。

「どうも」

つられてお辞儀をしてしまった。

そこには昨日屋上で着物を着てた少女が立っていた。

今も着物だけど、まあこの学校は何故だが私服でも別にいいらしいのだ。

俺は制服だけだな。

今はそんなことはいい、とりあえず目の前の問題をかたづけよう。

えーっと、確かあいつは昨日屋上にいた。名前は、ああ、川村郁だ。

「あれ？　なんで転校生が俺の名前をしってるんだ？」

疑問に思った。俺は昨日名前を教えていなかったはずだ。

「同じクラスなのでからクラスメートの名前を覚えて当然です」

「そうか」

顔はどうやって一致したんだ？　　とはツツコまないことにした。

「写真を見さして貰いました」

「心読まれた!？」

心を読むとは恐ろしい奴。

「普通に森下様が呟いてました」

呟いていたか、今度から気をつけよう。

それはいいとしてすこし疑問が出てきた。

朝会ったオカマの名前も川村って名前じゃなかったか？

聞いてみよう。

「お前にお兄さんはいるのか？　オカマみたいな」

「兄様はいますがオカマみたいかどうかは知りません」

ちがうのか？　いやもう一個質問しておこう。

「それじゃそのお兄さんは身長2mあるか？」

「それぐらいあると思います。して森下様、この質問にはどのような意味が？」

「朝にお前さんと一緒の名前の川村翔流という長身でマッチョのオ

カマに会ったから気になったただけだ」

「兄上はオカマでしたか」

「お前のお兄さんの名前は翔流なのか？」

「そうです」

やはりそうか。

とりあえず口封じしないと俺がオカマと言った事がばれて殺されるな。

「兄上に直接聞いてみましょう」

「ちよつと待て」

今さらりと恐ろしいことを言っただけ。

「何ですか？」

「なにを聞くつもりなんだ？」

「オカマなのか聞くつもりです」

やばいな。

「誰に聞いたって聞かれたら何て応える気なんだ？」

「クラスメートの森下様からです」

素直だ。限りなく素直だ。

このままだと真剣にヤバイな。

「そのことは絶対に聞かないでくれ」

「何故ですか？」

「俺が殺される」

「誰にですか？」

「お前のお兄さんにだ」

コレではキリがないな。

『キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン』

と、その時にナイスタイミングでチャイムが鳴った。

「授業に遅れる！ お前も急げよ！」

俺は逃げる様に階段をあがり、郁の横を通っていった。

教室に付くとまだ先生は来ていないのか、とても騒がしかった。とりあえず教室に入るために扉をスライドし開けた。

バフッ

頭に黒板消しが振ってきた。

丁寧^{ていねい}に黒板消しにはたっぷりとチョークの粉が付いていた。髪の上のほう^{うへ}が真っ白になった。

それを見て教室中に笑いが広がってさらに騒^{さわ}がしくなった。今時^{いまとき}こんなこと幼稚^{ちうい}な事をするのは大地^{おおい}しかない。

大地は腹を抱えて笑っていた。

俺はそんな大地の所まで行き、思いつき^{おもいつき}拳を握り締めてから振り上げて、振り下ろした！

が、そこには大地がいなかった。

少し前の方に大地が立っていた。そして誇らしげに胸をはり高笑いをして宣言した。

「あまいぜ静間！ そんな攻撃俺にあた　」

最後まで言わす前にアッパ^{アッパ}ーがキレーに決まった。

「決め台詞を最後まで言わせるよ」

大地は顎を押さえながら言った。

「誰^{たれ}が言わせるか！」

「お前^{まへ}ら、授業中に楽しそうやなあ」

ビクッ

熊をも圧倒しそうなほどの威圧を背中に感じた。

実際に遭遇したことは無いけどな。

そういえば木曜の2時間目^にって国語だったっけかな？

恐る恐る振り返ると、そこにはいつの間^まに來たのかスキンヘッドにサングラスを着用した笹熊^{ささくま}先生が立って

いた。

名前は笹熊潤也^{ささくまじゅんや}。

黒いスーツ、黒い靴、そしてさっき言った通りスキンヘッドにサングラスをかけているのでその姿はまるでヤザだ。

何でこんな人が先生なんだろうってたまに真剣に思う。

出身地は北海道、なのに大阪弁、本当に変わった先生だった。
「お前らそんなに話したいんなら廊下になつとれ！」

！！

廊下になつとれ！？

こつこれは言うべきなのか……、言つた後の先生が怖い。

大地が、

「先生！ 廊下になつとれって何ですか！」

と、大声で言つた。

教室にいる生徒の半分が爆笑、半分が英雄と大地をたたえた。
「いつ言つたとうりの意味や」

うわ！ 苦しいのがわかつてるがそのまま通そうとしてる！

「どうすればいいんですか！ 実際に見て下さい！」

さらに教室中に笑いと歓声が沸き起こつた。

「うつ、もうええ！ お前ら廊下に立つてろ！」

「はーい」

俺と大地は廊下に出た。

大地が廊下に出たときに「勝つた」つと呟いた。

どう勝つたのか気になるが聞かないことにしよう。

「そういえば今日転校生がきたんだが知ってるか？」

廊下に立つてて数分、突然大地が話しかけてきた。

「知ってるよ。着物着てたな」

「ほう、もう知ってるのか」

「昨日屋上でサボる時に見た」

「そうか」

「そつだ」

「そう言えばまだ神流来てないな」

「まだ来てないのか？」

あさつきかな

浅月神流。

性別は男。

クラスメートで遅刻と居眠りの常習犯。

昔の俺みたいな奴だ。

まあそのおかげで神流とは知り合えたもんだけどな。
別の理由も少し歩けど。

成績は俺が中の中とすると、神流は中の上、授業を聞いているのに神流の方が上である。

顔はいいが性格がなんと言つか、大地に似ている。

俺の中でのあだ名は大地2号だ。

「それにしてもねみいな」

大地がどんどん話題を変えていく。

「ああ、そうだな」

しばらく話していると大地が、

「あゝ、神流が来たみたいだ」

と、言った。

耳を済ましてみると、タツタツタツタツ、と階段を駆け上がる音が響いてきた。

「本当に神流か？」

「絶対そうだと思うぜ、最近この時間に登校してくるからな」

「そういえば2時間目の途中によく来てるな」

神流が3階まで上って来たようだ。

「よう」

「よう神流」

神流は俺達に気がついて挨拶を返した。

「おはよ、静間と師匠」

神流は大地のことを師匠と呼んでいる。

理由は入学式の事件がきっかけだ。

あの事件の後すぐに神流が弟子入りしにきたらしい。

何を習っているのかは俺は知らない。

知る気は無いけどな。

何か怪しいことをしてるらしい。

「師匠達が廊下に立たされてるって事は国語か？」

「なぜ俺が立たされていると国語なんだ？」

俺は少し怒りながら言った。

「廊下に立たせる先生が国語の笹熊先生だけだから」

「そう言えばそうだったな」

神流はよく居眠りをしてるの見つかって廊下に立たされてたな。

「で、師匠達は何をやったんだ？」

「大地が黒板消しトラップを仕掛けやがったんだよ」

「ああ、だから髪の毛が少し黄色と白いところあるのか」

ドサッ

隣で何かが倒れる音がした。

「てか当の本人は寝てるしな」

横を見ると大地が横になって寝ていた。

さっきの音は大地が倒れた音らしい、あの音から見て結構な衝撃があつたと思うのだがそんなもの無いかのように眠っている。

蹴って起こそうかと考えていると、

『キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン』

チャイムが鳴った。

「うーん、よく寝た！」

大地が大きく体を伸ばして立ち上がった。

「お前倒れたのによく起きなかつたな」

「寝てなかつたし」

「寝てなかつたのかよ！」

「お前を脅かすために寝たフリをしていたのだ！」

「さすが師匠」

「神流意味わかんねー事に感心するな！」

「廊下で大声出すとうるさいよ」

大地がそれだけ言うのと逃げていった。

いつの間にか廊下には授業を終えた生徒が出てきていた。半分開らいの生徒が俺を見ていた。

「くそ！ 逃げやがって！」

大地は人ごみに紛れてもうそこにいるか分からなくなった。
また逃げられた！ まださっきの分も終わってないのに！
「大地！！ 出てきやがれ！！」

俺の叫びが休み時間の校舎に響き渡った。

ヤンキーと風紀委員と遅刻魔（後書き）

そろそろ本格的に恋愛要素入れないとな〜w

でもまだしばらく新しい奴出したいし〜

まあいいや！w

後々考えよう

感想よろしくです〜w

意外と黒い転校生

大地が逃げて数分、その間大地を追いかけていたが、タイムアップのチャイムの音が校舎に鳴り響いた。

「どうだった静間？ 大地を捕まえたか？」

クラスメートの一人、野之山永兎ののやまひつとが開いてある窓から顔を出し、俺に聞いて来た。

どうやらさっきの廊下のやり取りを見ていたらしい。

「ハアハア、あんにやろ、ハアハア、逃げ切り、ハアハア、やがったか、ハアハア」

俺は息も絶え絶えに説明した。

とりあえず教室に入ろうとしたら、

「な」に女子見てハアハア言ってたんだ静間」

後ろから俺を挑発する声がした。

声の主は言うまでもなく大地だ。

「誰の、せいだと、思ってたんだ！」

俺は振り返りながら拳を固めて残る力を使いパンチを放った、がつ、そこにいるはずの大地はおらず、かわりに永兎の顔があった。

スピードの乗ったパンチは途中で止められるはずもなく永兎の顔面にクリティカルヒットした。

「ぐはあ！」

ドゴッ！

更に鈍い音をたて柱に後頭部をぶつけ、席と席の間に倒れた。

その光景を見て騒いでいたクラスの連中がいつせいに静かになった。やべー、死んでないよな。この歳で殺人犯何て嫌だぞ。

「静間がとうとう殺人犯に！ 何て悲しい」

大地が大声で言う。

「こんな事になったのは誰のせいだと思ってんだ！」

俺は大地に大声で言い返す。

俺が近くで大声を出しているのに全く反応しない。

とりあえず大地を無視し教室に入り、倒れている永兎のもとに行き、息があることを確認した。

よかった、まだ息はしてるな。

とりあえず先生が来てはやばいので、永兎を起こす事にする。

「おい、永兎起きろ」

肩を持ち揺すりながら名前を呼んでみる。

反応がない。ただの屍のようだ。

クラスの誰かが呟いた。

ゲームに頭を侵されてるな。

「ん、んん？」

声を無視し、しばらく揺すっていると意識が戻ったようだ。

「大丈夫か永兎？」

とりあえず俺の責任が半分なので心配する。

もう半分は当然大地な訳だが、あいつは携帯で何かしている。

おおかたゲームかメールだろう。

今日こそあいつを殺そう。

今は永兎の事を片付けないとな。

間もなくして永兎の意識がハッキリしたのか、返事が返って来た。

「あなたは誰ですか？」

あゝ、お約束ですか？

「冗談だよ！ そんなお約束がそうそう起きるかこの野郎！」

永兎はそう言つて俺の頭を叩いた。

教室はそれを見るとまた騒がしさが戻った。

さすがにこのクラスも、クラスメイトに死人と殺人犯が出るのは御免らしい。

嫌なら手伝えよ。

永兎が無事だと分かったので俺は席に戻ることにした。

俺の席は窓際の一番後ろで横には誰もいなかったのだが、今は郁が座っていた。

そういやクラス一緒だったっけ。まあいいや、大地追いかけて疲れた、昼休みにそなえて寝よう。いつものように腕を机におき、その上に頭を置いて寝る体制になり数秒、すぐに夢の中に落ちていった。

夢の中、俺は小さな女の子に会った。その女の子は俺に一言、こう言った。

「私と一緒に死んでくれないかしら」

「怖いよ！」

ゴスッ！

「~~~~~ッ！」

いきよいよく立ち上がったために、誰かに頭突きをかましてしまった。

クラスの皆が俺の事を見て黙っている。

最近こんな事多いなと思いつつも、俺は頭をさすりながら横を見るが、そこには椅子に座って教科書を見る郁だけしかない。

もう教科書貰ってたんだ。

など考え、後ろを見ると、山口が大の字に仰向けに倒れていた。

「あゝ」

俺が声を出すと、今まで以上に静かになった。

耳が痛い……、取りあえず何か言わないと。

始めに浮かんだ言葉を口に出そうとした時、

「埋めましょう」

隣からそんな言葉が聞こえて来た。

隣にいるのは勿論郁である。

まさか大人しそうな彼女からそんな言葉が言うとは思わなかった。

その意見に賛成の声（特に女子）がクラ中から響きわたった。

よくこれだけ叫んで隣のクラスの先生が文句を言ってこないのかが不思議だ。来ないほうかつごうがいいのは確かだけだな。

皆が騒いでいると、山口が目を覚ました。

「あれ？ 俺はこんなところで何してんだ？ それになんだか顎が痛い。まあいい、そんな事よりお前等！ 授業中に騒がしいぞ！ 静かにしろ！」

山口の声で皆が静かになった。

「ちっ」

横から舌打ちが聞こえた気がするけどそこにいるのは郁なので聞き間違いだろう、そんな事より気絶する直前の記憶がないらしい。こいつ記憶があればそれを理由に俺を退学にするかもしれんな。

『キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン』

チャイムが鳴ったので今日の数学は終わった。

そういえば数学って4時間目だったな。取りあえず飯食って、今日は係じゃないけど図書室に行くとするかな。

それだけ思うと席を立ち、購買にパンを買いに行くことにした。

今日もメロンパンでいいか。

売り切れる心配は無いのでゆっくり歩く。

3分もしない内に購買についた。

そこにはラッシュが終わり、荒れ果てた姿の購買があつた。

購買のかごの中には数個のパンが入っているだけだった。

その中にお目当てのメロンパンが後1個だけ入っていた。

危ない危ない、残り1個だけだったぜ。

そう思い取ろうとしたら横から別の腕が伸びて来て同時にメロンパンを取った。

「「あつ」」

そして二人同時に声を上げた。

その声はどこかで聞いたことのある声だった。

「もっ森下君」

名前を呼ばれた方向を見るとそこには昨日廊下でぶつかった少女だった。何故か顔を赤らめながらこちらを見ている。

名前を教えてないのに名前を呼ばれるの、今日はこれで2回目だな

」。

などという意味の無い事を思いつつどうしようかとも考える。

「君は誰？」

とりあえず名前を聞くことにした。

「えっと、あの、1 - Cの摩美崎咲蔵まみさきさくぞうつと言います。咲蔵と呼んでください」

咲蔵と名乗る少女は丁寧に深々とお辞儀した。

「あつ、どうも」

こちらもおつられてお辞儀を返した。

つられてお辞儀を返すのも2回目だ。

とどうでもいいことをまた考える。

「あゝ、昨日はぶつかって悪かった。それと静間って呼び捨てにしてくれてもかまわん」

名前は何故か知っている様なので取りあえず呼び名を教えた。

「あ、はい、静間さん」

さらに顔を赤くしながら答える。

「熱があるのか？ 顔が赤いぞ」

俺は咲蔵のおでこに手をそえた。

「ち、ちち、違います！」

ますます顔を赤くしながら俺から離れた。

「まあいいや、メロンパンいるか？」

当初の目的のメロンパンの事を聞いた。

「べ、べべ、べ、別にいいです！」

すごい身振り手振りではない事をあらわしている。

落ち着かない奴だ。

と、思いつつ、

「じゃあ、このメロンパン貰ってもいいか？」

「は、はい。どうぞどうぞ」

腰が低い子だ。

と、思いつつもちゃっかりメロンパンは貰っていく。

「じゃ、また会えれば会おうね」

俺はそれだけ言つと購買を後にした。

「は、はい！ またお会いしましょう」

後ろから挨拶が聞こえて来た。

さつきからあの大きな声のせいで注目されまくってたな。まあ大地のせいでなれてしまったがな。

はあ、最近まあ、や、まあいいや、が口癖になってきたな。まあいいけど、あ、また言っちゃったよ。いや、思っただけなんだけだななどの下らないことを思いながら教室でパンの最後の一欠片を口に放り込み、教室に戻る途中で買ったカフェオレを飲んで流した。

そろそろ図書室行つて借りた本を返そう。

机の中から本をとり、図書室に向かった。

行く途中で大地と会つたので、朝の分と2時間目の分の怨みを食らわすために殴つて蹴つて最後に回し蹴りのコンボを決めた。

「うぎゃ」

大地は叫びながら、自分から飛んだんじゃないんだろうかと疑いたくなるほどキレーに曲線をえがき飛んでいった。

「なんだよいきなり」

大地はダメージをうけていないのか、すぐに立ち上がって来た。やっぱりさつきのはわざとだったみたいだ。

「朝の分の怨みだ」

「ならいいや」

いいんだ。

それから大地も図書室に行くと言う事なので一緒に行くことにした。行く途中大地が俺をおちよくる事を言うの殴つたり、葛原の事でおちよくつて来るので殴つたり、通算10回位殴つた。

大地は始めは痛がつていたが途中からはなれたのか痛がるフリが飽きたのか、痛がるそぶりを見せずにすぐにおちよくつてくる。

今度からは鳩尾狙うか。

「図書室に到着」

大地が言った。

気付くと図書室が目の前だった。

上靴を脱ぎ下駄箱に入れて図書室に入った。

今日はうるさい先生はいないようだ。

よかったよかった。

俺は借りる本探し始めた。

やはりこの図書室は拾いと思う、図書室と言うより図書館だ。

なかなか本は見つからなかった。

「おぬしが探してるのはこの小さい文庫本か？ それともこの大きな本か？」

大地が本の精（？）をし始めた。俺は迷わず小さい文庫本を選んだ。

「正直者にはこの大きな本も付け」

「二冊も借りれるか！」

「ごふっ」

最後まで言い終わる前に鳩尾に一発食らわした。

「あ、ああ、あ」

本当に苦しそうに手を伸ばしている。

大地の事だ、すぐに復活するだろう。

俺は大地の手から小さい文庫本を奪い取り、そのまま借り出し口にむかった。

「これを返してこれを借ります」

「解り、ました」

この声とこの喋り方、どこかで聞いた気がする。

前を見ると、そこには眼鏡をかけた葛原が本の後に入れている貸し出しカードに返却日を書いている姿があった。

あ、あれ！　なんで葛原が図書室で借り出ししてるんだ！？

俺は心の中で思いきりびつくりした。

「どうか、しましたか？」

びつくりしたのは心だけではなく顔にまで出ていたらしく、葛原がいつもの無表情で聞いて来た。

「あゝ、なんで葛原が貸り出し口で本を貸しているのかと思いきまして」

緊張して喋り方が変になった。

「私が本を、貸している、のはおかし、の？」

一言一言切って喋る。

葛原の喋り方は個性的である。

まあ俺の回り奴らは大体のやつが喋り方は個性的なんだかな。

「葛原って、図書委員ではないじゃないですか」

葛原は図書委員ではなく委員長なのだ。

だから図書委員であるはずも無い。

「辻川、先生に、今日は、図書、委員が、皆さん、お休み、な、そのなので、私から、頼まれ、ました」

図書委員いないなら呼び出せよ、いや、葛原が自分から申しでたんならしょうがないかもしれんが、せめて呼び出ししようよ。それにしても喋るのに時間がかかるな。そしてなんか和む、氷の女王と呼ばれてるけどいい奴なんだよな。そこに俺が惚れた理由の一つだけだな。

「今日担当の図書委員がいないのか、なら俺はいるからもうでいいよ」

それだけ言っただけで借り出し口に入ろうとしたが、葛原が俺を止めた。

「いい、私、一人で、する」

「なら俺も一緒にするよ。元はこつち事だし」

借り出し口に入ってから仕事をして数分、借りる人達の波が途絶えた。

「今日は何故かいつもより借りる人が多かったような気がする」
とりあえず疲れたので椅子の背もたれに体を預けながら横を見る。
そこにはさほど疲れてないのか、いつもど通りの無表情の葛原の姿が合った。

風で銀色の髪が揺れ、独特の雰囲気をもちだしていた。
なんだか俺がここにはいてはいけない気がする。

葛原いきなり席を立ち、どこかに行こうとする。

「どこ行くんだ？ まだチャイムは鳴ってないぞ」

いつもの俺なら話しかける事など出来なかったが、今は何故か話し掛けることが出来た。

「そろそろ、掃除の、準備を、しない、と、いけま、せん」

葛原はそれだけ言うとお書室から出て行った。

「静間く、葛原といっぱい喋れてよかったな」

それと入れ違いに大地が入って来た。

さつきからずっと見ていたようだ。

「緊張しまくった」

俺は椅子から背中をはなし、机に体をなげたした。

「お疲れさん」

「ああ、本気で疲れた。そして大地、なにさりげなく つけてんだよ。きもいぞ」

「うるせー、いいじゃないか。それにしても葛原があんなに長く男子と話してるの見るのは初めてだな」

「そうなのか？」

それからチャイムが鳴るまでの間、大地と馬鹿な話をしていた。

意外と黒い転校生（後書き）

今回は恋愛要素を何個が入れてみました！ なれてないので成功してるかなり不安です。少しでも面白いと感じたなら感想お願いします

鬼先生

「森下、今日は逃がしません。掃除してもらいますからね」

「ああ、そうだな」

今俺は鈴原に首を後ろからつかまれ、旅行に使うときのキャスターバックみたいにひきずられている。

視線が痛い。

廊下で掃除をしている生徒や、話している生徒が俺を思いっきり見ていた。

いつも風紀委員まがいな事をしている。

そんなことをしているため、俺と大地が話していると、叫びながら追いかけてくる。

俺は被害者なのにな、こいつと関わると大地とは別の意味で面倒だ。

「森下、何か失礼なこと考えてない？」

鈴原がこちらに顔を向けて笑っている。

腕に力が込められて首が痛い。

笑っているのだが、何かが背筋を走る感覚がする。

「なっなんでもない！」

こえ、今殺されるかと思った。それにしてもなぜわかったんだ？今も早く逃げ出したいが鈴原に首をガッチリと掴まれている。

この拘束から逃げれたとしてもすぐに捕まるだろうしな。こいつスポーツテストの100mで11秒を出している。ついで言うと鈴原の握力は50だ。

そして俺は100mは13秒。走ったところで二秒もしないうちに捕まるだろう。そしてその前にこの怪物握

力から逃れないといけない。問題は山ずみだ、そんな面倒なことをする気はさらさらない。

「そう言えば俺の掃除場所って何処？」

俺は掃除が始まるたびに逃げていたので今まで一度も掃除をしていない。

「そっそれは、何処だったかしら」

俺を探してるうちに忘れたいらしい。

「どうするんだ？」

「先生に聞くしかありませんね」

「先生って、どの？」

「担任の先生に決まってるでしょ、ほかの先生に聞いてもわからないわよ。そういえば昨日の放課後先生が5・6時間目をサボった森下を見つけたら職員室につれて来いっていったわね」

あゝ、死亡フラグがたっているみたいだ。しかも昨日から。こいつはどうしたものか、このまま行けば確実に殺される。だが逃げるにしてもこいつから逃げれる確立は0だし。

「困ってる様ですね」

と、考えていると右から誰かが耳元で囁いてきた。

ん？ いつの間に、鈴原に気付かれずによくココまで近寄れたな。鈴原に気付かれずに俺の横まで来た奴に興味があるので、囁かれた方向に頭を向けようとしたが、今は首をつかまれ動かせないの目だけで右を見た。

そこには川村が、気配を殺しながら付いてきていた。

ふゝむ、川村は何か謎だ。

「かなり困ってる。助けてくれないか？」

助けてくれそうなので聞いてみた。

「嫌です」

「ぶふつ、お前ひでな！」

きつぱりと断られ、俺が叫んだ時には川村はもう既に階段を降りていた。

「森下、何がひどいんだ？」

鈴原がこちらに向き、腕の力が強くする。

「ちょ！ ギブギブ！ それ以上強くされたら折れるゝゝ！」

俺は思いっきり抵抗した。

抵抗した時に、丁度腕がスカートの中にはいり、大きくまくれあがった。

「あ」

「~~~~~」

鈴原は顔を真っ赤にしてスカートを両手で押さえた。

こ、これはやばい、真剣に殺される。

幸い鈴原の拘束は外れたので俺は死ぬ気で走り出した。

「はあ、はあ、死ぬかと思った」

「おつかれちゃ〜ん」

「古いな」

「古いかな？」

今俺は鈴原からの追跡を逃れ、大地と一緒に屋上のいつもの場所で休憩している。

「それにしてもよく鈴原から逃げ切れたな。俺でも校舎だけって限定されたら逃げれないのに」

大地の逃げるは既に人間の限界を超えかけている。

「そりゃ死ぬ気だったしな。お前は窓が閉まってもぶち破ってでも逃げるだろ、限定とか関係無しにさ」

「さすがに窓まで割って逃げようとは思わないよ。せめて人を盾に使うくらいさ」

それも充分ダメだろうと思うが俺もするのでつつこまない。

「まあ逃げたのは運がいい事にバナナの皮が落ちてたのもあるがな」

そう、本当に俺が逃げた理由はバナナの皮が廊下の曲がる端のほかに落ちていたからなのだ。

俺は少し大回りに走ったからよけたが、鈴原は最短で曲がろうと直でバナナの皮を踏んで思いっきりこけていた。

その後の事は俺は見えていない。

だつて怖いじゃん。

「大地お前ひで〜よな〜。俺が捕まってるんだから助けてくれてもいいじゃないか」

「なんでだよ〜。お前見てたほうが面白かったから助ける気なん

」

「見てたんなら助けろ！」

鳩尾に一発殴った。

「ぐふっ」

「お前は俺が死にそうなめに遭ってるときにたかみの見物でもしてたのか！」

自分で言った事でさらにム力ついたので今度は頭を一発殴った。そっちは全く効いていない様だ。

「たかみの見物をして何が悪い！」

大地は腰に手を当て胸を張って宣言した。

無防備な鳩尾にもう一発拳を叩き込んだ。

「ごほっ！ ごほっ！ 痛いではないか」

大地は少し苦しがつてからすぐに復活した。

「当たり前だ。痛くしてるんだから」

もうそろそろ鳩尾もだめか。だがしばらく待つて頭を殴ればまた効くようになるしいか。

たまに大地が不死身に思えてくる。

それはないか。

「それにしても転校生の川村つて奴は腹黒いな」

「なにがだ？」

「だつてお前が助け求めたのにきっぱり断つてたじゃないか」

「お前あの会話が聞こえるほど近くにいたのか？」

立ち上がったから大地の後ろにまわり、大地の頭の上に両手を置いた。

「何で俺の後ろにまわりこむ？ そしてこの手は何だ？」

「何でもない。質問に答えろ」

「そ、そうか。なら応えてあげよう！ まあ、そんなに近くにはいなかった、お前が通った階段に隠れていただけ、川村が降りて来て俺に気が付き、一部をクスクス笑いながら話してくれた」

言い終わったと同時に、頭の上の手に体重をかけて固定して、大地の背骨を蹴って叫んだ。

「なら助ける！」

わりと本気だったのは内緒。

「いてゝゝゝっ」

大地は痛さのあまり転がった。

「おいおい、こんな狭いところでころ
ドスッ。」

大地は階段の屋根の上から落ちた。

「がると落ちるぞゝって、もう遅いか」

一応心配はするか、原因作っただの俺だし。

「大丈夫か？」

俺は屋根の上から飛んで降りた。

ボスッ。

「ぐはっ」

「大丈夫かーって、あれ？ 大地何処行っただ？」

屋上を全体見るようにしてみろが、誰もいない。

「お前の、下、だ」

俺の下から、最後の方が力尽きた声が聞こえた。

下に目線を下げると、そこには死にそうな大地の姿があった。

んゝ、見なかったことにしよう。

大地を置いて俺は屋上を後にした。

大地を置いて屋上を後にしてから10分後、俺は今、廊下にボロ雑巾状態、一言で言うところ死にそうである。

なぜこんな状況になったかと言うと、10分前にさかのぼる。

回想

屋上から出てチャイムが鳴り階段を降りていると、目の前に鈴原が出現。

出現した瞬間に鈴原の顔が鬼になった。

当然逃げた。

が、すぐに捕り、半殺しにされた。

あの風紀委員まがいめ、自分が風紀を壊してるんじゃないのか？

しかも何気に凄いことしやがり、外部に傷は見えないように、内部破壊をしやがった。

なんだよ！ どうやってたら内部だけダメージ与えられるんだよんちくしょう！

などと思いつつ、半分死んだ身で教室に戻るのに5分、やっとな教室には当然担任の先生がいるわけで。

「もーりーしーたー、お前今日も掃除サボったな」

鬼の声が聞こえてきた。

鈴原とは別の鬼が出てきた。

コレはもう半分確実に殺されるな。

ひめさかぐら
名前、姫坂歌倉。

俺のクラスの担任で体育教師。

性別は女。

厳しいが優しい先生。

結構人気がある。

スタイルもかなりいいいな。

だが怒ると鬼のように怖い。

体罰禁止なのに殴ったり蹴ったりしてくる。

正直怖い。俺はこの先生は苦手だ。

とりあえず俺はこの教室から逃げよう。

右向けー右！ 俺はそう思って体を180°回すがまだ鈴原から受けたダメージが抜け気っておらず思うように体が動かない。

そこに後頭部にとび蹴りを食らわされた。

「「おお！」」

教室中の男子が喜ぶ。

先生……今日はスカートじゃなかったんですか？
俺は廊下でたまに痙攣をするだけの姿になっていた。

回想終了

そして今にいたる。

ああ、もう意識が掠れてくる。

そして俺が最後に見たのは、鈴原の黒い笑みだった。

気が付けば俺は自分の机で寝ていた。

今までののは夢かと思ったが体中が痛いのでそれはないだろうと思った。

そして今日もまた、外は暗かった。

外が暗い〓教室も暗い、で、ある。

今日は体中が痛い。

丁寧に足は念入りに破壊されているので暗い教室にしばらくいなくてはいけない。

携帯のディスプレイに映る時間を見た。

8:00

……………8時？

！！

「8時だと……………！！」

俺は叫んだ。

叫んだせいで体中に響いた。

くそう……

今日も地獄か。

「もう嫌だ……………！！」

俺の叫び声が夜の校舎に響いた。

鬼先生（後書き）

さて、そろそろネタが切れそう（あ

このままやるとかなり厳しいな！

けど俺は頑張るよ）

そして俺はこれ以上話を長く書けない。

だって俺にそこまで長く書くと死んじゃうから（銃声

まあ、応援してくれたら嬉しいな！w

世界一周（前書き）

こんな小説に60人近くの読者が着いてくださり感激です。
つたない文章ですがよろしくです。

世界一周

やべー、今日は死んだかと思った。

真剣に生きた心地がしなかった。

家に帰ったのが10時を軽くまわっていたからな。

俺はあの後足の痛みが治まるまで教室に2時間近くいた。

やはりその間ずっと物音が鳴り止まなかった。

しかも俺の席の横の窓のカーテンに人影がちらほら見えるからさらに怖い、教室は3階にある。

また失神するかと思った。

たまに、

「こつちにおいで、こつちにおいで」

で、聞こえてくるしマジでやばいよ。

でも50分くらいたつとなんだか少し慣れて心に余裕ができたのでよく声を聞くと聞き覚えのある声に似ていた。

声は大地に似ていた。

あいつ！

俺の怒りは一気にマックスまでなり、人影が見えたときに力任せにカーテンを開いた。

「おらー！ 大……ギャ~~~~~！！」

一瞬思考が停止してから、俺は絶叫した。

なんせ人影の正体は頭から血を流した男だった。

そして俺は失神した。

そして次に目を覚ましたときは10時だった。

早く帰らないとお母さんが帰ってくる。

足はまだ痛みが耐えれない事はないので帰るとするか。

これ以上ここにいたらまた失神しかねん。

そっぴや俺は何でさつき失神したんだ？

思い出せない……、思い出そうとすると頭は痛くなる。 まあ無理に

思い出さないでおこう。こういう事になるのは嫌な記憶に決まってる。

深く考えない事にした。

それから俺は鞆を持って家に帰って、今にいたると。

時間は10時37分。

お母さんが帰るのはもう少し後だな。とりあえず飯を食おう。

台所に行くとか机の上には冷めた夕食と、手紙が1枚置いていた。

手紙にはこう書かれていた。

「商店街の福引で世界一周が当たったから少し行ってくるわね。」

学費とかは心配しないでね、今まで働いて貯めたお金が通帳に入ってるから。とりあえず明日の朝とお昼は買ってね。お金は冷蔵庫に

おいとくから勝手に使ってね。」

.....。

見間違いか？ 親が子供置いて世界一周なんてするわけないよな。

目を閉じて、そして開いてからもう一度よく見る。

「商店街の福引で世界一周が当たったから少し行ってくるわね。」

学費とかは心配しないでね、今まで働いて貯めたお金が通帳に入ってるから。とりあえず明日の朝とお昼は買ってね。お金は冷蔵庫に

おいとくから勝手に使ってね。」

やはり文章はかわらない。

.....。

.....。

世界一周！？ 商店街の福引で世界一周ってどんだけ大規模なんだ

よ！

はあ、俺はこの歳で1人暮らしを.....。

もういいや、考えるの疲れた。今日は飯食って風呂に入って寝よう。頭の中を真っ白にして俺は飯を食い始めた。

飯を食い終わってから食器を洗い、風呂に入った。

「さっぱりしたぜ。」

時間は12時きっかり、寝るにはちょうどいい時間だ。

その前にメールを返すかな。

携帯の画面を見ると、メールが2通来ていた。

1通は迷惑メールのようだ。

無視しよう。

もう一通は大地からだった。

内容。

『お前の母ちゃん商店街の福引で世界一周当たったんだってな！

お前おいていかれたんだって？』

だった。

何でお前知ってんだよ！！

返信。

『何故お前は知っている！』

送信中にメールが届いた。

差出人は大地だった。

内容。

『何故お前が知っている！！ のこたえは商店街でその場面見たからだ』

こえええ！ まだ完全に送信しきれてないのに帰ってきやがった！

俺は震えていると、大地からメールがもう一通来た。

内容。

『お前の行動は読みやすいんだよ』

うわぁム力つく、明日死刑だ。

俺はそれだけ誓うと布団に入り眠りに入った。

少女が砂場に座って泣いていた。

何か見たことある奴だな。

と、思っていると、少女が一言喋った。

「どうして一緒に死んでくれないの？」

ガバッ。

「4時間目の夢の続きかよ！」

勢いよく起き上がる。

はあはあ、最近よくこの夢見るな。まあいいけど。

時計を見ると、時間は7時30分。

ちようどいいな。

布団から出て服を着替える。

着替え終わってから朝飯を食べようとしたが、お母さんが今はいいことを思い出した。

当然ご飯はできていない。

なんかないかな。

冷蔵庫を探してみた。

あったのは薄い四角形のチーズ、たまねぎ、にんじん、じゃがいも、鶏肉、カレールー。

カレーの材料が入っていた。

しかもなぜかルーまで冷蔵庫の中に入っていた。
もう少し探ってみよう。

今度は封筒に入ったお金が出てきた。

お金まで冷蔵庫かよ。

えーっと、どんだけ入ってるかな。

ふんふん、10万か。それだけあればいけるな。

確か食パンが机の上に残ってたよな。

チーズを冷蔵庫から取り出し机の上を見る。

食パンはっけーん。

たったらたっただっん

静馬は食パンを手に入れた。

おっと、俺までゲーム脳になりかけた。

最後の食パンを取り出して上にチーズを乗せてオーブンにいった。

さてと、この間にご飯を炊くかなーっと。

一応お母さんが料理を作り忘れることも多いので料理は多少は作れる。

あ　　ったくんだから洗わずに炊けるから楽だな〜と、これでいいや。

ちょうどパンも焼けたな。
できたパンを一口かじる。

あ、バター塗るの忘れたか。まあ少し食べにくいだけだけどいいか。
パンを一気に食べきった。

「口でかいな」

「まあな」

さてと、学校の用意をするかな〜って、ん？　何かおかしい、今俺は誰と会話したんだ？

「早く学校の用意しろよ〜」

後ろからまた聞こえてきた。

誰かなんて言うまでもない。

「またピッキングしたんかこの野郎！」

俺は無動作で回し蹴りをした。

「どこ蹴ってんだ〜？　俺はここだぜ〜」

大地は玄関に向かう廊下の前に立っていた。

大地の奴、人をさんざんおちよくりやがって、今日は急所にきつい一撃決めてやる。

そして今日もまた、大地を蹴ると心に誓う。

最近心に誓うことが多いな。

いや、そうでもないか。

さてと、用意も終わつたしそろそろ行くか。

鞆を持ち学校に向かう。

時間は8時、徒歩でも余裕で間に合う。

それに昨日自転車壊れたしな〜。

「おはよう静間。今日は早かったな」

「おはよう！　静間！」

鍵をかけて階段を下りると、下にはもう勇と留美がいた。

「おはようさん。今日からしばらくお母さんがいないからな。早く

起きなきゃいけないんだ」

軽い挨拶をして、話ながら歩いた。

「どうした？ おばちゃんどこかに行ったのか？」

「ああ、商店街の福引で世界一周当てたからいまからしてくるてきな置手紙をおいて行ってしまった」

「子供置いて世界一周って、お前のおばちゃんひどいな」

「別にいいさ。これでしばらく自由に暮らせる」

「世界一周いいな」

勇と話していると、留美が話しに入り込んできた。

「結婚したら連れて行ってやるからな」

「わゝい、やった」

うわあ、いきなり二人の世界作りやがった。しかも留美は結婚って言葉に反応しているのかわからない！

勇と留美を見ていると不意に横から声をかけられた。

「で、お前はこれからしばらくどうやって過ごすんだ？」

「うお！ いきなり出てくるなよ」

大地だとわかった瞬間にすねめがけて蹴りをはなった。

「よつと、あぶねえな。当たったらどうするきだ」

大地は飛んでかわしてからいつもの調子で話しかけてきた。

「当てる気でやってんだよ」

「それぐらいわかってる」

「なら聞くな」

それから学校に着くまで軽い話をしたり、俺の今後どうするかを話したりした。

その間、勇と留美は二人の世界から帰ってこなかった。

世界一周（後書き）

さて、今回はいつもより短くなってしまいました。
表現力が無いので小説も変になってしまいますね。

これからがんばりたいと思います！

どうかこれからも末永くお付き合いください（まだ7話しか出して
ないくせに……

おぼっちゃまと悲劇（前書き）

一話一話の文章がどんどん少なくなってる気がするな。
今度から気をつけよう

おぼっちゃまと悲劇

疲れた。

大地の野郎、朝教室に入った瞬間、

「静間の母ちゃん世界一周旅行に昨日行ったんだって！」

と、大声で宣言しやがった。

次の瞬間に俺は大地の意識を奪ったがな。

だが時すでにおそし。

HRが始まるまで質問攻めにあつた。

どんだけ質問があるんだろうとしんそこ思った。

そんな親が世界一周に行つたくらいで。

質問には全部答えたがな。

3時間目が終わる頃には一年の全クラス知らないものはいなかった。

先生まで知つてやがる。

そりゃ、生徒がこんなけ騒げば当然の結果か。

昼休みは質問される前に逃げた。

まあ購買でパンの争奪戦に参加しなくちゃいけないのもあるしな。

パンを食べ終えてからはいつものように図書室に行く。

今日は質問攻めのせいで本はまだ読み終わっていない。

図書室まで来て質問攻めに会うことはないだろう。

俺はそう思い図書室へと向かった。

図書室に向かう途中も何回か質問にあつたが面倒なので無視して進んだ。

少しして図書室の入り口が見えた。

ふう、これでやっと静かになる。

俺は胸をなでおろした。

図書室に入ると、中はいつもの様に静かだった。

一年はあまり図書室には来ないのでかなり心が休まる。

借り出し口には今日も葛原が座っていた。

また図書委員が来なかったのか？ 図書委員皆飽きたのか？

まあいいや、葛原と話せるしな。

「よお葛原」

自然に話しかけた。

昨日の短い会話でだいぶ慣れたようだ。

「こんにち、は。森下、君」

葛原もこちらに気付き挨拶を返した。

「今日も手伝いか？ 後俺のことは静間と呼んでくれてかまわん」
「うわ、俺変なこと口走ってないか？ やはり慣れたと言ってても少し前より話せるようになっただけのことだからな。」

「うん、静間君って、呼ぶ、ね」

了承してくれたよ。

結構気に入られているのか？

自惚れてみる。

「横すわっていいか？」

少し自身が付いたので大胆にいつてみる。

「いい、よ」

許しが出たので葛原の横に座る。

精神的にかなり疲れてきた。

やはり好きな人を前にすると息がつまる。

「静間、君の、お母、さんて、今、世界一周、旅行、に、でかけて、
るんだって、ね」

思いがけない人から例の質問が来た。

「まあね、昨日の夜置手紙だけ残して急に行っただんだ」

「たいへ、んだね」

心配してくれてるのだろうか？

普通にこたえよう。

「ご飯を考えて作ったり、材料の買出しがめんどくさくて大変だ」

「料理、作れる、んだ」

料理に反応した。

「人並み程度にはね」

うゝん、それにしても葛原と話していると自分が自分でないとなまに錯覚してしまうな。

緊張しすぎなのか？

「今度、静間君、が、作った、料理、ごちそう、してくれ、ない？」

「ぶっは」

きいた瞬間ふきだしてしまった。

え？ 何？ 葛原が俺の料理食べるって？ 聞き間違いか？

考えていると、

「だめ？」

ズキューン！

何かが俺の心を打ち抜いた。

俺より頭1個分くらい小さい葛原が小首をかしげる動作に頬を少し染めてるてうわめづかいをするのは反則ものだった。

「あ、あ、ああ、い、いつでもか、かまわんぞ」

めちやくちゃ動揺してしまった。

「友達、誘って、今度、行くね」

葛原は気にしてないようだ。

ああ、友達も誘うよな。

少しがっかりしながらも了承した。

それから少し話して、そろそろ掃除の準備に行くと言って図書室を出て行った。

俺もそろそろ鈴原に見つからない場所に移動しておこう。

俺は図書室を後にした。

『キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン』

掃除の終わりを知らせるチャイムが校舎に鳴り響く。

いやゝ、今日は良い日だ。昼休みは葛原と話ができ、鈴原にも見つからず、掃除の時間は屋上で快適に過ごせたぜ。

一昨日よりはだいぶ暖かくなったな。

数分後に授業が始まるから教室に戻るか。

5時間目って何だったっけ？ まあいいや、教室についたし時間割をみよう。

そう思い教室のドア開けると、そこには下着姿の葛原がいた。

あれ？ 何で教室で葛原が着替えてんだ？ あ、そういえば5時間目体育だったっけ……。

この学校はなぜか更衣室がなく、体育は2クラス合同なので着替えは片方の教室でする。

『キヤーーーーーッ』

俺の存在にきづいた着替え中の女子から悲鳴を上げた。
やべえ。

悲鳴が聞こえたと同時にドアを閉めて隣のB組に入った。
顔見られただろな。やっぱ先生に呼び出されるか？

と数秒心配したがすぐに心配をやめ、体操服に着替える。

過ぎたことは考え無いことにしよう。

それにしても葛原のスタイルよかったな。でも俺の顔見たよな。
嫌われないか？

などどあほな事を考えつつ着替える。

着替え終わって廊下に出たときに声をかけられた。

「女子の着替えはどうだった？」

「何のことだ？」

声のかけられたほうに顔をむける。

そこにはジャージ姿で寒そうに立っている大地の姿があった。

大地ってそういうえば冬苦手って言ってたな。

そのくせ屋上にはついてくる。

まあ、ジャージと普通の服じゃあ暖かさが違うからな。

大地は学校に来るとき、私服でたまに制服を着てくる。

今日は確か私服だったよな。そりゃ着替えればだいぶ寒いかな。
適当な推理をする。

「さっき静間、A組のドア思いつきり開いてたじゃないか。そして

悲鳴が聞こえた後にB組の教室に逃げてたしな」

「見たたのかよ！ 見たたのなら教えてくれよ！」

ム力ついたので足払いをして、大地が飛んで避けた。

足払いを避けられるのを予測して俺は大地が飛んだ瞬間に足払いに使った足を止め、上に軌道を変えて蹴った。

大地は俺の脚を掴んで避けてから着地と同時に俺の足をさらに上にあげた。

「うおっ」

急に足を上げられたせいでバランスを崩して背中から倒れた。

「そんな攻撃じゃ俺に当てられないぜ」

とつさに受身をとってダメージをやわらげたが、さすがに地面がコンクリ防ぎきれないものがある。

そんな俺を大地は見下すように見る。

「背中いて〜と、スキあり！」

足払いをした。

油断していた大地は足をクリティカルで払われた。

「うぎゃっ」

「わっ」

そこへ運動場に行くはずだった男子の上に大地が倒れこんだ。

男子の名は雪広一真。ゆきひろがすま

性格は真面目、が一番あっている。

頭は良いが運動が苦手のバリバリの文科系。

その前に体が悪いのでいつも体育は見学である。

当然眼鏡をかけている。

でもその眼鏡はかなり個性的だ。

何せふちが金でできているのだから、これで気づくものがあると思うが一真は雪広財閥のおぼっちゃまだ。

雪広財閥、世界各国のいろいろなところに会社を持つ大企業である。

一真はそこのおぼっちゃまだが、普段はその力を使わない。

使ってるところは見たこと無いな。変なところで真面目だから。

そしてそのお坊ちゃまはというと大地の下敷きになっている。

一真の身長は165cm、大地と20センチも差があるのでかなり大変なことになっている。

「だ、誰。重い」

「女に重いつて言ったらだめなんだよ！」

大地が裏声で答える。

どこにそんな体格のいい女がいるんだよ。

「ご、ご、ごめんなさい！」

緊急事態発生。

1、大地が女声で言ったことを一真が信じてパニック。

2、一真暴れる。

3、大地と一真の間に俺の足が入って絡まり外れなくなる。

4、俺の足が抜けない。

「大地！ どきやがれ！」

抜こうとするがやはり抜けない。

「いや、動けない。静岡上半身は？」

「うつぶせで動けないよ」

「大地君と静岡君だったのかい。てつきり女子かと思ったよ」

一番下にいる一真は案外冷静だった。

「さて、この状況をどうやって打破しようか」

おぼっちゃまと悲劇（後書き）

11話に番外編でも書こうかと思っています。
とりあえず人気があるキャラの番外編を書きたいな。

野球だ！（前書き）

予^{かも}定変更 W

11話で番外は難しいのでずれると思います。
では、今回も楽しんでくださいね。

野球だ！

「助かった」

運動場についてからつぶやく。

「そうだな。体育にも間に合ったな」

大地があいづちを返す。

俺が何かを呟いて、大地がそれにあいづちを返すのがパターン化してきたか？

その後、授業のため教室に向かう先生が、廊下で絡まる俺たちを見つけてくれたおかげで何とか助かった。

「森下、今日は出席してるな」

姫坂先生が俺を見て言う。

今日の体育は2・Bと合同、女子も一緒にやる。

何で女子と男子で分けないんだろつか本気で考える。

「とりあえず今日は野球をする。チームは8組、男子5人女子4人で組めよ」

は、い、不満の声と喜びの声が聞こえる。

「静間ちゃん一緒に組むか」

「静間一緒に組も」

「留美が行くなら俺も入るか」

大地達が声をかけてくる。

「ちゃんをつけるな」

とりあえず大地の頭を殴る。

コレで4人集まったな。後男子2人に女子3人か。

「静間、君、一緒に、組まない？」

「一緒に組みませんか？ 森下様」

「一緒に組むか静間」

葛原と川村と永兎が来た。

川村と永兎は分かるが葛原から申し出が来るとは意外だったな。

他の男子が睨んでるけど気づかないふりをしよう。

「静間モテモテだな」

大地がちゃかす。

「うるさい」

腹えぐるように殴る。

「ぐっふ！」

その場に膝をついてうずくまる。

「後男子と女子1人ずつか」

追い討ちをかけるように大地を力いっぱい踏んでから上に立って話を進める。

「そうだな、後は残った奴を集めるか？」

「勇がそれでいいなら私もそれでいい」

「そうだな、そうするか」

普通に話を進めていると、

「あ、あの、古寺、君、だいじょ、うぶ、なの？」

葛原が大地の事を心配そうに聞いてきた。

大地のくせに葛原に心配されるとは、うらやましい。

「大丈夫大丈夫、あと少しで起きるよ」

俺は大地からおりる。

「ぐげっ」

おりる時さり気なく体重をかけた。

少し苦しうだな。

「それにしてもなぜか皆静間の名前を言って集まってきたな。つつ

かなぜ黄泉川まで静間を呼ぶ？ 普通勇についていくだろう」

永兎が俺に耳打ちしてくる。

「そうだな。何でだろう」

面倒なので適当に返す。

「あそこにちょうど男子と女子が二人あまつてる奴がいるぞ。なんか言い争ってるが」

いつの間にか復活した大地がグラウンドの真ん中を指さす。

大地の指さす方向を見ると、そこには大地が言ったとおりに男子と女子が言い争っていた。

よく見るとその男子と女子は麗と鈴原だった。

「二人とも何をしてるんだ？　こんなところで夫婦喧嘩してると回りに迷惑だぞ」

勇がちやかし半分で注意する。

「誰が夫婦だよ！」

二人の声がぴったりとハモる。

「すごいシンクロ率じゃないか」

大地がつけたす。

「うるさい」

二人同時に大地の鳩尾みぞおちを殴って大地を沈める。
見事なシンクロだと思う。

「とりあえず俺たちのところに入るか？　後男子と女子が1人ずつ足りないんだ」

誘ってみる。

「それなら良いぞ」

「良いわよ」

二人はすぐに承諾した。

「これでチームが完成したな」

俺が思うにこのチーム最強じゃないか？

何気にほとんどの奴が運動神経が良い。

大地と勇は中学の時バレー部レギュラーだったし、二人ともパワーが強く動体視力もかなり良い。

当たればほぼ確実にHRは出るだろう。

今もバレーは一応続けているらしい。

よくサボってるようだがな。

麗は一応中学のときにも番長と呼ばれていたので多分打ってくれるだろう。

記憶が正しければスポーツテストの成績はかなりよかったしな。

永兎は野球部だからきつと打つだろう。

永兎とは高校に入ってから付き合いなので分からないが運動神経が良い事は確かだ。

高校入ってすぐにあつたスポーツテストでまあまあの成績を残していた。

鈴原は動体視力が良いみたいで、中学の時に体育でドッチボールをしたが一発も当たらなかった。

留美は勇に付いていくほどの運動能力を持っている。

川村の力は未知数である。

強いのかな？

葛原は俺はあまり知らない。

苦手らしいが一応通知表はオール5なので運動神経は良いだろうと思われる。

俺は体育が好きだが成績は並だ。

こいつ等みたいにするくはない。

付いていくので精一杯だろう。

とりあえず先生にチームができたことを先生に伝える。

「よし、8チームできたな。とりあえず来たもん順からA B C D E F G Hにする」

かなりアバウトだな。

俺たちのチームはHだった。

まあ最後に決まったしな。

「対戦カードはA対B、C対D、E対F、G対Hな。その次が勝ったチーム同士と負けたチーム同士で勝負。一番勝利の多いチームには体育の成績を5にしてあげます」

その一言でやる気の無かった生徒の心に火がついた。

「勝つぞ！」

「おお！」

各チームから気合の入ったかけ声が聞こえてくる。

対称的に俺たちのチームはそんなに燃えてなかった。

「やるからには勝とうか」

勇が落ち着いた様子で言う。

「そうだね」

留美も勇の意見に同意する。

「静間ちゃんと一緒に野球ができればそれでいいな」

大地が気持ち悪いので殴る。

「皆様の实力を見せてもらいましょう」

川村が意味のありげな事を呟く。

「野球部だから一応勝たないとな」

永兎は野球部魂を燃やしている。

「負けるのは嫌いだ」

麗はスキル、負けず嫌いが発動した。

「がんばるよ」

鈴原が気合を入れる。

「静間君、一緒に、がんば、ろう」

葛原が嬉しい事を言う。

「やるからには勝とうか」

俺は同意する。

皆負ける気はまったくといっていいほど無いらしい。

「よし、まずはA対B、C対Dの試合を始める。試合時間は10分、点数が10点差で表の裏の回が終われば10点差つけられたほうを負けとする」

グラウンドは結構広いので、2試合同時進行、つめればもう一試合できそうだが、やりにくくなるので2試合ずつなのである。

ルールは結構まとまだな。

チーム仲の良い者同士で組んでるため、力は大体均等のはずだ。だが、予想は大きく裏切られた。

Aチームの男子5人は全員野球部だった。

女子の方は陸上部とソフトボール部が半々、このチームはなかなか強いだろう。

それに対してBチームは文科系の集まりだった。
このチームはだめだろうな。

多分1回で10点差取られるだろう。
すでにノーアウトで5点取られている。

こっちの試合は面白くなさそうなのでC対Dを見に行く。

C対Dはなかなか白熱していた。

両チーム体育会系と文科系が半々で入っていた。

「静間く、どっちが勝つか賭けをしないか？」

大地が賭けに誘う。

「嫌だ。風紀委員まがいが睨んでるもん」

鈴原が俺と大地を凄い顔で睨んでいた。

「そうか。あいつうるさいからな」

大地は俺から離れる。

結果はDが勝った。

決め手は野球部員がいたかいないかみただった。

A対Bはとくに終わっていて、すでにE対Fの試合が始まっていた。
た。

さてと、俺達の出番だな。

俺達の対戦相手のGチームはすでにグラウンドに立っていた。

ふむ、Gチームもなかなか強敵みたいだ。

男子は中学の時、野球部でレギュラーだった者達ばかりだった。

女子は全員ソフトボール部の人達だ。

「これは楽に勝てそうも無いな」

永兎が相手を見て呟く。

「相手がどんなに強かろうが関係ねえ。勝つと思えば勝つんだぜ」
麗がいい事を言う。

「それもそうだな」

勇が同意する。

皆もうなずく。

「がんばって勝つぞ」

『おおおお！』

留美のかけ声で皆に気合が入ったようだ。

攻撃は相手からだった。

「とりあえず誰が投げるの？」

鈴原が疑問をぶつける。

そう言えば俺達まだポジションとか決めてなかったっけかな。

「そうだな。麗、頼む」

すこし考えた後、とりあえず麗に頼んでみる。

「いいぜ」

軽く了承してくれた。

「後は適当な」

勇が指示をだす。

「はい」

皆は適当な場所へ行く。

かぶると思ったが案外かぶることなくスムーズに事がはこんだ。

ポジションはこうなった。

ファースト

1 塁手、川村 郁。

セカンド

2 塁手、葛原 零奈。

サード

3 塁手、鈴原 舞。

ピッチャー

投手、水鏡 麗。

キャッチャー

捕手、井野内 勇。

ショート

遊撃手、黄泉川 留美。

ライト

右翼手、古寺 大地。

センター

中堅手、森下 静間。

レフト

左翼手、野之山 永兔。

いい感じだな。

女子は自然と塁の守りとなった。

さすがに女子にキャッチャーをさせなかった。

だって麗のボール何気に速いからな。ビビッて取れないかもしれない。

ポジションてきにやはり皆勝つ気である。

「プレイボール！」

姫坂先生が叫ぶ。

さあて、本気で行くのでしょうか。

野球だ！（後書き）

今回はキャラをいっぱい出してみました。

野球のルールはとか専門用語よく分かりませんが頑張って書きたい
と思いますw

次回は誰かが大活躍しますよー。

野球は終了（前書き）

祝！1000人突破！

嬉しいことです！

この調子で頑張りたいと思いますにゃ！

この話は前回の続きです

野球は終了

試合が始まった。

とりあえず1球目は軽く投げるように指示を勇が出す。

そして栄光の第1球を、投げた！

スパアアアン！

凄い音がグラウンドに鳴り響いた。

打者の女子はただ見てるだけだった。

そして少し震えているように見えた。

球はすでに勇のグラブに納まっている。

やべー、はえー。

130キロ位でてるんじゃないかと思うほど速い。

てかアレで軽くなのか？ 化け物ですか。

仲間によかったよまったく。

「結構麗の奴速い球投げるな」

「うお、なんだ大地か。なあ、今の球見えたか？」

いつの間にか横にいた大地に聞いてみる。

「見えるぜ」

大地が気軽に応える。

なんとも心強いお言葉だ。

「欲しい」

「うお、今度は永兎か」

横にいつの間にか永兎がたって呟いていた。

お前らポジションはどうしたんだとツツコミたいが、面倒なのでスルーした。

「ア〜ウト」

気の抜けた声が聞こえてきた。

もう1人目から三振を取ったのか。

休憩中のチームの1人が審判をしなくてはいけない。

そのため、審判になった奴はやる気がない。

バッターボックスに坊主頭の男が入ってくる。

こいつは飛ばしそうと思ったが、

「アゝウト」

うわ、一瞬でアウトかよ。一応あいつ野球部なのにかわいそ。

お前それでも野球部か。あんな球も打たれへんのか。

仲間にヤジを飛ばされる。

見てると少し同情してしまう。

「俺ら楽でいいな」

大地が地面に座っている。

「よつこいしょと、そだな」

永兎は親父っぽいことを言いながら座って同意する。

「さすがに試合中に座るなよ」

さすがにコレはダメだろうと思い注意した。

後後ろから突き刺さるような視線を感じたしな。

「そんなこと言ってももうチェンジだしな」

「俺達動かなくていいじゃないか」

大地と永兎はなまけ気味だった。

「3アゝウト。チェンジ」

大地の言った通りすぐにチェンジした。

それにしてもこの審判の声は気が抜けるな。

さて、今から攻撃なのだが誰から打つか考える。

「適当でいいじゃん」

大地の提案。

「それもそうだな」

すぐに決定した。

「それなら俺から行くぜ」

大地がバッターボックスに立つ、が、何かが無かった。

「大地、バッター忘れてるよ」

ああ、バッターが無かったのか。

留美がバットを持つていく。

そして手が一瞬大地と触れる。

それを見て勇が嫉妬し、鬼のような目で大地を睨む。
大地がそれに気付きあわてて手を離す。

バットが落ちる。

それを慌てて拾おうとして留美と手が触れる。

そしてまた勇の嫉妬の炎が燃える。

なんて悪循環だ。

そして思う。

あれ？ 勇ってこんなに嫉妬深かったわけ？ そして大地ってあんなに怖がりだったわけ？

結論。

深く考えないことにしよう。

大地は遊んでるようにも見えなくは無いが、勇は本気っぽい。
怖くて見れない。

留美を勇の元に返してやっと落ち着いたようだ。
気を取り直すように大地がバットで遠くを指す。

おお、ホームラン宣言だ。

敵のピッチャーがかなりム力ついている。

「あのピッチャー、確か推薦されてきたらしいぞ」

永兎が説明してきた。

ここって推薦とかあったんだな。

「敵チームの男子は全員推薦だったような気がする」

だから野球部員が1年に多いのか。

「永兎は違うのか？」

「聞きにくいことさうつと聞くな」

違うらしい。

「大地本当にホームラン打てるか？」

永兎が聞いてくる。

「大地だから打つんじゃないのか？ 人の感情を乱すのに命かけた

りする奴だからな」

「最後の方はわけが分からんが信じてるんだな」
永兎が聞いてくる。

「一応中学からの悪友だしな」

「そろそろピッチャーが投げるな」

勇に言われてそちらを向くと、球を投げる瞬間のピッチャーの姿が映った。

球は結構速かったが、

カッキイイイイイイン！

凄くいい音をたてて球が大地に打ち上げられた。

「おゝ、すげゝ」

敵の外野の奴が走るがどう見ても間に合わない、というかとどかない。

なぜならボールは学校の敷地をこえたからだ。

おお、場外ホームランだ。

ピッチャーは膝について落ち込んでいた。

うわゝかわいそゝ。

「次は私が行かして貰います」

川村が宣言する。

「ああ、分かった。打ってこいよ」

勇が応援する。

「あれぐらいの球なら結構楽に打てるぞゝ」

気軽に大地が助言を言う。

そして今気付いたが川村の体操服のジャージには猫模様が縫い付けられている事に気が付いた。

少し可愛いと思ったがその横には鎌を死神が縫い付けられていた。

どんなことが起きている！

気になるが聞かないことにした。

最近気になることが多いよ。

川村はバッターボックスへ立ち、大地と同じようにホームラン宣言

をする。

他のチームが盛り上がる。

ピッチャーは相当切れているようだ

ここからでもピッチャーのデコに青筋が浮かんでるのがみえる。

完全にキレている様子だ。

そりや自分よりもひとまわりもふたまわりも小さい女にホームラン宣言されればキレるよな。

川村がバットをかまえた。ピッチャーは球を握りなおし、投げるかまえをする。

あいつは打てるのだろうか？

疑問に思っていると、

カキイイイイン！

バットに球が当たる音がまたしても聞こえてきた。

おゝ、またしても綺麗に飛んでいくな。

外野の奴がまた走るが全く間に合わない。

さすがに場外までは打てずに球はグラウンドのすみのほうに落ちた。外野の奴は急いで取って投げるが、川村はすでにホームに帰っていた。

これで2点目だ。

「川村すげえな」

感心する。

そんな体でよく飛ばせたと思う。

「郁ちゃんすごい」

留美が川村に抱きつく。

こいつらいつの間にこんなに仲良くなってるんだ？

「留美様。郁ちゃんなどと呼ばないでください」

郁ちゃんとは呼ばれたくないらしい。そしてなんだか抱きつかれているのも嫌そうだ。

あまり顔は変わってないがな。

「姉妹みたいだな」

大地が横で眩く。

たしかに郁に留美が抱きついてるのを見ると姉妹に見えなくもないな。

背も一緒ぐらいなのでさらにそう見える。

「うんじゃ次は俺が行くな」

俺はバットを取りバッターボックスへ向かう。

ピッチャーを見ると、死にそうな顔をしていた。

そりゃそうか、2回連続でホームランを打たれたんだからな。

しかも片方は女子と言うところがきついな。

だが少しも罪悪感芽生えてこない。

だって俺がやったんじゃないもん。

……………ごめんなさい。

正直きもかったね。

ピッチャーは何とか持ち直したようだ。

さて、俺にあの球は打てるのか？

さっき見てたが結構速かったしな。

まあ何とかなるでしょう。

バットをかまえる。

ピッチャーはかなり警戒している。

さっきの事もあったしな。

ピッチャーも構えて、投げた。

俺はその球をよく見て、振る！

カキイイイイン！

あまり飛ばないだろうと思いつつ走る。

予想は当たりあまり飛ばなかったが、相手は警戒しすぎて後ろに下がりがすぎていて球を取りそこなっていた。

ヒットだな。

1塁で俺は止まる。

欲張りすぎてアウトになる気はさらさらしないしな。

次のバッターは葛原だった。

ピッチャーは葛原に見とれていた。

それを見た俺はなんだか凄く殴りたくなったが、今は動けなかった。後で大地を殴ってこの怒りをはらそう。

ピッチャーは球を投げた。

投げたはいいがスピードは無かった。

葛原は思いつき振った。

カキイイイイイイン！

いい音とともに球が飛んでいく。

その間に俺はホームインした。

葛原も続いてホームイン。

「やった、ね。静間君」

これで4点だ。

葛原が手を握ってくる。

正直嬉しい状況だ。

そして相手のピッチャーは完全に自信喪失したみたいだ。

その後も試合は続き、勇が場外ホームランを打ち、麗がそれに続いて場外に打ち、永兎は普通にヒットを打って、その後に留美がランニングホームランを出す。

そして鈴原が3塁打をだして最後に大地がピッチャ返しを決めて10点を取った。

ピッチャーは大地の打った球が大変なところにあたり気絶、保健室に運ばれた。

10点目を取ったのでこれでコールド勝ちだ。

やはり予想したとおりこのチームは最強だった。

この後も余裕で勝ち続けた。

なんだろう、野球って楽しい！なんてことはありえないので無視だ。

そして優勝した。

まあ当然といえば当然だった。

ヒットを出せば次の打でホームランが出る。

そして守りは麗が投げるだけで終わるため果てしなく楽しかった。
そして約束どおりの優勝商品を貰った。

まあ分かるのは夏休みはいつてからだけだな。

「先せゝい。これはサボっても体育は5のままですかゝ？」

大地が聞いた。

「そうよ。だけどサボったら私の鉄槌が飛ぶからそこは覚えておい
てね」

姫坂先生が大地と俺に極上のスマイルをおくってきた。

だが目は笑っていなかった。

こえゝサボらないようにしよう。

そして体育の時間は終わった。

今日は職員会議があるとかで5時間授業だ。

「よっし今日はこれでやっとな帰れるぜ！　一緒にかえろゝぜ！」

大地が嬉しそうに誘った。

「いいぜゝ」

断る理由が無いので、勇と留美も誘い、いつものメンバーで帰る事
になった。

それにしてもまともな時間に帰ったの、久しぶりな気がしてきた。
明日から休みだし、いい感じだなゝ。

くだらない話を家に着くまでした。

野球は終了（後書き）

今度は休日の話をかきますw

11話の後は 休日でも書くことと思います！
希望がありましたらよろしくw

買い物と警察と誘い

時刻は10時。

ふわ~~~~~は。

大きなあくびをして俺は目覚めた。

今日は休みなので自由でいられる。

とりあえず昼飯に昨日の晩飯の残りを食うことにした。

昨日は帰ってからカレーを作ったは良いが作りすぎてしまった。

まあ明日食えばいいか。

と、言う具合に解決したんだけどね。

「今日はこれからどうしようかな」

カレーを食べながら今日の予定を考える。

今日は予定も無いしな。あ、そうだ。冷蔵庫の中からだから買出しに行かないと。

残りのカレーを腹の中に流し込んでから、皿をながしにいった。

皿は帰ってから洗うとするか。

まだ寝巻きのままなのを思い出して部屋に戻って着替え、その後に封筒から1万だけ出し、カバンを持って家を出る。

さてと、買い物に行きますかなと。

時間は12時を回っていた。

今は商店街にいる。

商店街は隣町にある。

行くとするなら自転車か電車だ。

いつもは自転車で行くのだが、自転車が壊れてしまい今日は電車で来た。

はあ、めんどうだ。

服装は長袖の上にジャンパー、下は長ズボンという適当な格好だ。前より少しはあったかくなってきたはいるが、やはりまだまだ冬ま

つさかり、まだ薄着では外は歩けない。

寒いしめんどくせー。

「大通りでぶつぶつと呟いてさらに溜息をつきながら歩いてると危ない人に見えるぜ」

誰かに肩を叩かれてから失礼な事を言われた。

まあ誰かなんてすでに分かっているんだけどな。

肩を叩かれたほうを見ると、予想通りの奴がいた。

「お前はここで　　うおわ！？　大地、なんて格好してんだ！？」

大地の格好は凄かった。

「別に、ただ散髪に來ただけだぜ」

大地は答えになってない答えを言って散髪屋を親指で指した。

そんなことどうでもよかった。

俺は大地の格好をただただ見るだけだった。

前まで坊主だったのに今見たらスキンヘッドになっているし、服装は黒いスーツに黒いネクタイ、靴まで黒い、さらにサングラスまでかけている。

一瞬笹熊先生かと思ったが、笹熊先生のほうが身長が高いしなんだか怖い。

大地は口元が少しつりあがっているので怖さがあまり出ていない。

「お前のほうが十分怪しいから」

まあ周りから見たら十分怖いが、先生見慣れているからそれほどじゃないな。

周りの人は怪訝な顔をして過ぎていく。

「はっはっは！　　気にするな」

おおげさに笑って肩を叩く。

話しながら歩いていると、むこうのほうから青い服を着た人がこちらに向かって来た。

「その人、ちょっといいかい？」

青い服の人は大地の肩に手を置いた。

「ん？　なんだ？」

大地は軽い感じで言った。

「ちよつとこつちに来てもらおうか」

「なんで俺が連れて行かれなきゃいけないんだ？　なあ静岡って、おゝいどこだ」

面倒なので俺は大地からさり気なく離れて他人のフリをする。

「何を言っているんだ？　そんなことはいいからついて来なさい」
青い服の人が大地を連れて行かれる。

「おい！　俺はなにもしてねえぞ！」

最後の叫びが聞こえてきた。

「これは珍しい、メールメールと」

俺は携帯で写真をとり、勇達にメールを送る。

内容。

大地、警察に捕まる。

それだけ携帯うつって俺はその場を後にした。

さて、この後大地がどうなるのか気になるが、早く食材を買おう。
時間は13時15分。

「重いな」

両手には野菜やら肉やらといろんなものが入った袋を持っている。
大地が捕まり数十分、俺はスーパーで買い物終わらし商店街をぶらついている。

前から葛原歩いてきた。

気が付いたようだ。こちらに向かってくる。

「静岡、君。こんにち、ちは」

葛原の服装を見て心臓が止まりかけた。

普通の白いスカートに灰色のカーディガンはおっていた。
表情はいつもどおりだがな！

「ああ、こんにちは」

それを見て何とか普通に答えた。

笑顔だったらちよつと膝をつきかけたかもしれない。

「買い、物、です、か？」

俺が手に持った袋を見てから言った。

「そうだよ。で、葛原は何してんの？」

「散歩、かな？」

葛原が首をかしげながら聞いてくる。

少しドキリとくるが無表情で葛原そのしぐさをするとなんだか変な感じがするな。

「俺に聞くなよ」

とりあえずツツコみを入れる。

「何で、ここに、いるんだ、ろうね」

また首をかしげる。

「忘れたのかよ」

両手がふさがってるためデコピンはできない。

また今度にするか。

「じゃあそろそろ帰るな。腕が疲れてきた。それと明日あたりに鍋にするんだが友達呼んでこないか？ 一人で鍋つてのもさびしいかな」

さり気なく誘ってみる。

「うん、時間、が、あれば、皆、誘って、行って、見るよ」

おお、明日の予定ができたな。

足取り軽くして俺は家へ向かった。

時間は6時30分、今俺は晩御飯を作っている。

今日の晩御飯の内容はミートスパゲティーにする。

めんどくさいからミートソースは今日買ってきた缶を使う。

さてっと、ぱぱっと作るか。

お湯を入れた底の深い鍋を火にかけてお湯が沸騰するまで熱す。その後に麺をいれて柔らかくなるまで待ちましょ。

さて、10分もしないうちにおいしそうかは知らないがミートスパゲティーができたぞ。

あついで冬にはちょうどいいぜ。

妙なテンションのままスパゲティーを食べ終える。

食べ終わってから皿を洗い、自分の部屋に戻ってから布団に倒れこんだ。そして今日の出来事を思い出してほくそ笑む。

他の誰かが見たら危険な人に思われるが今は気にしないぜ！

さらにハイテンションになってくる。

明日は大地とかも呼んで鍋パーティーでもするかな。

葛原と二人つきりてのはまだ無理なので葛原にも友達を呼んでもらう事になっている。

誘うときかなりてんぱっていた。

あの時は心臓の鼓動が葛原に聞こえるんじゃないかと思うくらいばつくんばつくんしたぜ。

その変なハイテンションのまま就寝時間が来た。

いつもどおり、とは少し違うが眠りについた。

買い物と警察と誘い（後書き）

今回はギャグもあまり無く、文章も短く、大変失礼いたしました。
今度はがんばって恋愛要素とギャグを多くしてラブコメっぽくしたいと思います！

張り切っていきます！

この次は軽い番外編でいきたいと思っています（あ
誰を使うかはまだ決めていません！
これから決めます。

つつわけで！ 次回お会いしましょう。

番外 散髪屋と警察（前書き）

今回は1400人突破記念で番外編を（中途半端？
きにはいけません
今回は大地視点だよ～w

番外 散髪屋と警察

「大地！ 起きなさい！ 休みだからってだらだらしてたら許さないよ！」

朝の9時、母ちゃんの怒鳴り声で起こされた。

「ふわぁゝは。分かった。今起きる」

大きなあくびをし、布団から出た。

「うゝ寒っ」

布団から出るとき、冷えた風が体をつつむ。

春になったといっても、まだまだ寒いぜ。

「早く着替えて飯にするか」

眩きながらクローゼットをあさる。

「今日の気分はゝ、これだ！」

叫びながら取り出したのは黒いスーツとズボンだった。

「髪が伸びてきたから今日は散髪に行くとするか。ついでにスキンヘッドにしてみよう」

服を着替えてから台所へ向かう。

はぁ、俺の家つてやたらと廊下が長い。

どれくらい長いかと言うと、どこかの旅館くらい長い。

何故そんなに長い廊下かと言うと、俺が。

「おはようございます若」

黒服を着た男と廊下をすれ違う。

「ちよつとまで」

すれすれ違った黒服の男を呼び止める。

「な、なんでしょう若」

「若って呼ぶな。大地と呼べ」

黒服の前なのでいつも見たいにふざけてはいけない。

「いや、しかしですね若」

「若って呼ぶな。そう呼ばれるのは嫌いなんだ」

「へえ、分かりました若」

「だから若って呼ぶんじゃねー！ わざとか？ わざとなのか！」
頭に両手でアイアンクローをかけながら怒鳴る。

アイアンクローとは、手で頭包み込むように掴み、握り潰すように力を加える技である。

本気を出せば体重60キロまで持ち上げられる。

「ギャーーーーー！ すいませんすいませんもう言いま、せんから離、し、て」

最後の方は力がなかった。

首はだらしなく垂れている。

それがこの黒服の最後の言葉となった。

「哀れ」

いつの間にか障子の隙間から覗いていた黒服達の1人が呟いた。

呟いた男の髪型はオールバックだった。

さっき俺が倒した男もオールバックだった。

そして障子の隙間から見てる男達もおそらく全員オールバックだろう。

言っておくが流行ってるわけではない。

これはこの家の掟らしい。

とりあえず邪魔だな。

「みせものじゃねえぞ！ 散れ」

俺がそう言つと皆走って逃げていく。

これでやつと落ち着くな。

さっきの様子で分かったと思うが俺は古寺組の次期組長だ。

普通だつて？ そんなわけあるか、俺の家は木浚塚を支配しているグループの1つだ。

この土地、木浚塚で大きな権力を持つ家が3つある。

1つが雪広家。

木浚塚だけじゃなく世界に影響をおよぼすかもしれない所だ。

そしてもう1つが紅牡里家。

この土地でかなりでかい権力を持っている。

紅牡里つてのは分かっているとと思うが、あの双子の事だ。

あいつらの事を知ったのは高校の入学式の時だ。

俺が騒動を起こしたすぐ後に、俺の仕掛けた机から煙があがり、次の瞬間黒い何かが走りまわった後、紅牡里姉妹が煙の中から出てきた。

そして姉妹の後ろで凄い爆音が鳴っていた。

姉の南菜深は笑いながら出てき、妹の美佐希は何事もなかったかのように出てきた。

あの時はやられた！ と、思ったな。

おっと、話がずれたが最後にこの古寺家。

本当はこの木浚塚は古寺家だけが支配していたそうなのだが5〜7代前の奴がへまをしてとられたらしい。

そして今の組長、つまり俺の父さんは今、取り返そうと頑張っている。

まあ俺にはどうでもいい話だ。

ついで言うところのことは静間とかには内緒にしている。

さてと、考え事をしてる間に台所についた。

俺が座るいつもの席の前には味噌汁とご飯が置いてあった。

チャッチャと食べて商店街にいくかな。

味噌汁をご飯にかけて腹の中に流し込む。

そして食べ終わってから茶碗をかかげて、

「これぞ秘術ねこまんま食い！」

……ヒュ〜。

ツツコみ役の静間がいないと淋しいぜ。

食べ終わったらし散髪にいくとするか。

鞆を持って出かける。

鞆の中は財布以外入っていない！ と思う。

なぜ、思う。なのかというと、最近整理してないせいで中身を見る気がしない。

財布は小さいポケットのところに入れているので鞆の中身を見なくてもいい。

それをいうと財布以外はいっていないは嘘になるな。

どうでもいいけどな。

それから1時間位たって時間は11時。

今俺は散髪屋で順番待ちをしている。

暇なので携帯でゲームをする事にした。

ゲームは皆おなじみテトリスだ。

これは結構はまる。

テトリスをすること数分、

「古寺さ〜ん」

順番みたいだ。

せっかく順調だったのに、ハイスコア100万まで来て。

でもいいけどな。

最高200万だし。

携帯を閉じてポケットにしまう。

「こちらにどうぞ」

定員さんに案内される。

案内された場所は一番奥の椅子。

奥の椅子には何か他の椅子とは違う雰囲気を出していた。

なんというか禍々しい雰囲気が出ていた。

そしてある事に気が付いた。

椅子に何かついてるのだ。

それがこの禍々しい雰囲気を出す正体なんだろう。

そしてその禍々しい雰囲気を出す正体は……髪の毛に付いた赤い何かだった。

しかも床には耳が転がっている。

「ちょ、何！ このやばそうな席！ 変えて！ 席！ 席変えて！」

やばそうなので席をかえてもらおうとしたが、

「そこしか空いてませんから」

その一言で拒否された。

そして強制できに席につかされ拘束される。

「ちよつとまてよ！ 俺一応このへんの土地主の息子なんだぞ！

これはないだろう！」

涙目でうつたえる。

もう必死だ、出ないと俺の血までシートに吸われるかもしれない！

しかもさっきなんか手にぬめつとした感触がしたんだよ！ さっき血吸ったばっかなんだよ！ そして俺はこんなキャラじゃねーよ

――！

心の中で叫び尽くした。

そんなことを俺が思ってる中、はさみとか色々はいつてるエプロンを着た女が近づいてきた。

その姿からして店員なのだろう。

「髪型どうしますか？」

なんだか軽い。

その声で少し自分を取り戻した。

「ス、スキンヘッドでお願いします」

「はい。わかりました」

軽いな。

女の店員はバリカンを取り出した。

「じゃ、そりまゝす」

ブルルルガリッ、ブルルガリッ、ブル、ガリガリガリガリガリ、プスン。

「あれ？ どうしたんだろ？」

バリカンのスイッチを入れたみたいだが何かがつまって動かなくなつたようだ。

だがやっぱりどこか軽い。

「あ、ああ、血がつまっていたのね」

アレ？ 何力今、トテモ危険ナ言葉聞コエナカタ？

「ちよつと血を洗い流してきますね」

女の店員は離れていった。

ヤッパリ今血ッテ、言ッタヨナ？ アノ店員ナノカ？ コノ惨劇ノ現場ヲ作り出シタノハアノ店員ナノカー……！

「ウウウウウウウウ（あの店員なのか）」

叫ぼうとしたがいつの間にか猿轡をはめられていた。

「お客さ〜ん、し〜ずかにね〜」

女の店員がバリカンを持って戻ってきた。

ああ、今日が俺の命日かもしれない。父さん、先立つ息子をお許しください。

それだけ思つて目を閉じた。

次開ける時はないかもしれないと思いつつ……。

それから少しして、

「ふ〜、今日は血が出ずに済んだ〜」

と、言う声が聞こえてきた。

遠くの方から「勝った」や「くそ〜、今日は失敗しなかったか。ほらよ、千円」と、しゃべる声が聞こえてくる。

賭けをしていたのか？ 俺が死を覚悟していたときにココの客は俺を賭けにしてたんだな！

俺も見る側なら楽しそうだからかけてたかも。

という考えがよぎったので怒るのを中止。

とりあえず金はらつてとつとココから出よう。

何か凄く怖い。

「いくらですか？」

「い〜くらなんてありませんよ〜」

さつき髪を切った店員さんが来た。

「そっちのいくらじゃねえよ！ 散髪代だよ！」

ボケ担当なのにツッコみをしてしまった。

そんなことどうでもいい。

早くここからでよう。

「1500円になりまゝす」

この店員はダメだ。

俺のペースが狂う。

財布から1000円札と500円玉を渡す。

「はい」

「ぴったりに預かりします」

「じゃあな」

「またのおこしおまちしております」

どこかの旅館かよ！

心の中でツツコみを入れつつは店を出る。

「いいもんはつけ〜ん」

散髪屋の横にある眼鏡屋でサングラスを見つけた。
買うぜ。

「このサングラスく〜ださ〜いな」

サングラスを持って店の中にはいる。

奥のほうに店員らしきおばちゃんがいる。

「10万円ね」

おばちゃんが値段を言う。

「高！ サングラス高！」

「冗談だよ。1万円ね」

「それでも高いぜ！」

「さらに冗談。1000円ね」

「高！」

「さらにさらに冗談。100円だよ」

「よし買った！」

100円でいいもん買えたぜ。

「嘘だよ。100円で売るわきゃないよ。1000円ね」
ダメだったか。

財布から1000円出しておばちゃんに渡す。

「まいど」

俺はサングラスをかけて眼鏡屋を出た。

お、静間はっけ〜ん。

出てすぐに静間の後姿を見つけた。

いつもみたいに寝癖が残った髪が見えるな。

寝癖直せよ。めんどくさくても。

静間の元に近づいていく。

「はあ」

何かぶつぶついつては溜息をついてるな。

まるで不審者だ。

「大通りでぶつぶつと呟いてさらに溜息をつきながら歩いてると危ない人に見えるぜ」

肩を叩きつつ思ったとおりの挨拶を試みた。

静間が何か俺に言おうとしたが、俺の姿を見て驚いている。

ふっふっふ、そりやそうだろう。スキンヘッドに黒服何だからな。

でもこれって家がヤクザですってばれないか？ 静間だしばれないな。

考えつつ静間と話ながら歩く。

しばらく歩いていけると、前から青い服に黒い帽子をかぶった男がこっちに向かってきた。

いわないでも分かるが警察だ。

ただの巡回か？

などと思っていると、警察はこちらに来た。

「その人、ちよつといいかい？」

これは俺に言ってるのだろうか？

「ん？なんだ？」

俺は何もしてないはずだが。

とりあえずできるだけ自然に答える。

「ちよつとこつちに来てもらおうか」

やっぱり俺のようだ。

「なんで俺が連れて行かれなきゃいけない〜んだ？ なあ静間って、

おゝいどこだゝ」

静間はさっさと逃げたようだ。

くそゝあのやるゝ。

「何を言っているんだ？ そんなことはいいからついて来なさい」

警察の人に引つ張られていく。

今度学校であつたら大声で静間は葛原が好きでゝす だがそれは実行される前に静間の手により半殺しにされました って叫んでやる。それから2時間後警察の奴らから誤解が解けて解放された。

どうやら通行人の誰かが俺と静間を見て、静間が俺に脅されてると思つて通報したらしい。

しゃばの空気はうまいぜゝ。

刑務所から出れた人みたいなことを思いながらまた町を歩く。時間は2時過ぎだった。

しばらく歩いていると、葛原を見つけた。

話しかけようか迷っている間に葛原は見えなくなっていた。まあいいや。

ゲーセンに行つて今日は帰る事にした。

家に帰つたのは夜の7時を過ぎていた。

携帯を見るとメールが2通来ていた。

1通目は勇だった。

内容。

釈放されたかゝ。

警察に捕まつたことを知っているらしい。

静間が教えたんだらうな。

2通目は静間だった。

内容。

明日の夜俺の家で鍋パーティーするぜゝ。

鍋か、春だけどまだまだ寒いしちようどいいか。

簡単に了解つとだけ返信しておいた。

その後俺は晩飯を食つて風呂に入つて寝た。

番外 散髪屋と警察（後書き）

え？　なんか静間と大地が同じに見える？

気のせいでしょう。

気にしてはいけません

では、更新はできるだ早くしますんで期待してまっけてくださーい
（結構自信満々？）

パーティーが始まる前に

「あゝ、昨日は結局眠れなかったぜ。だけど不思議と疲れが無いのはなぜだろうか？ まあそんなことどうでもいいや」

日曜の朝9時、昨日は寝れずに一晩中今日することを考えていた。考えていた内容は今日の鍋の事だ。

何鍋を作ろうかと一晩中悩んでいた。

もしかしたら夢の中で考えてたのかもしれない。

そして結論がこれだ。

「まあ皆が来てから考えよう」

鍋は後回しにした。

そうだ、まだ勇と留美誘ってないな、ついでに神流も誘うか。

飯を食いながら頭の中でときどきわくわくしながらいろいろと考える。

雰囲気は遠足前の子供と言う所だろう。

「鍋の材料買いに行くか」

鞆を取り立ち上がる。

そして重要なことに気がついた。

「着替えなくては」

そつ、まだ俺はパジャマのままだった。

「今日はどうするかな」

タンスをあさる。

「これだ！」

掴んだ服を思いっきり引っ張って取り出した。

「……………」

そしてその取り出した服を見て数秒フリーズした。

なんだ？ この服は？

服の様子は白と赤の縦じま、しかもズボンと帽子まである。

ズボンと帽子も一緒の白と赤の縦じまだった。

帽子はパーティーとかで使いそうなトンガリ帽子だ。

「何で食い倒れ人形の服がここにあるんじゃない！」

フリーズから治ると同時に俺は叫んだ。

しかも丁寧に眼鏡まである。

お母さんか？ いや、お母さんがこんな服買っわけがない。なら誰が？

頭の中で話し合う。

そして結論が決まった。

「あいつか！」

ピリリリ！ ピリリリ！

叫んだ同時に携帯に電話がかかってきた。

画面に大地と表示されていた。

電話を取る。

『よゝ静間ゝ。今日の鍋パーティーは』

「お前だな？」

最後まで言葉を言わずに質問をする。

『な、何のことだゝ？』

「俺の部屋のダンスに変な服を入れた張本人だ」

『さゝ、食い倒れの服のことなどしりませんねゝ』

「おまえじゃねえか！」

『な！ 何で分かったゝ！』

大地がめちゃくちゃ動揺する。

「俺まだ服としか言ってないわ！」

『H A H A H A！ ばれちゃあしょうがない！ 犯人は俺だ！』

アメリカ人っぽい笑いをしながら認める。

「その笑いむかづくなゝ」

『気にするな！ それと今日の鍋パーティーは何時からなんだ？』

「まあそれはおいとくとして、今日持つて帰れよ」

『分かったから今日のパーティーの時間は？』

「5時くらいに集まりはじめればいい」

『分かった。じゃ〜な〜』

大地は最後にそれだけ言って電話を切った。

「はあ〜〜〜」

ため息が自然と出てきた。

大地との電話は疲れるな〜。

「これにするか」

電話から１０分くらいして、時間は１０時をすぎ、そこでやっと服が決まった。

服とズボンは昨日と同じような感じになった。
着飾ってもしょうがないしな。

ん？ 男が着飾るってへんか？ まあいいや。

「さ〜てと、さっさと買い物に行くか」

買いすぎには注意するか。

鍵を閉めて家を出て、それから歩いて駅に向かう。

新しく自転車買わないと疲れるな。

歩きながら考える。

１１時、商店街前到着。

少し遅くなったがいつもの商店街に着いた。

電車がトラブルでつくのが遅れたぜ。こんなことがあるから自転車あつたほうがいいな。

まずは野菜を買って、次に肉を買うつするか。

八百屋に足を向けた。

１１時２０分、八百屋前。

「八百屋のおっちゃん」

いつものところにおっちゃんがないので呼んでみる。

「はいよ！」

筋肉質な体に頭にはハチマキ、冬なのにまくって肩まで上げたそ

で、腰に八百屋と刺繍されたのれんみたいな腰マキをした40後半くらいの男が出て来た。

「お、静間の坊主じゃねえか！ 今日はおつかいか？ 偉いな！」
声を張り上げてしゃべる。

よくここに来るのでおっちゃんとは顔見知りだった。

「おっちゃんうるさいよ」

おっちゃんの声はかなりでかい、客寄せをするのには最適だが普通に話すのは疲れる。

「おっちゃん、大根3本」

買い物袋を上げた主婦らしい人がおっちゃんを呼ぶ。

「まいど！ 360円だよ！」

おっちゃんの声が響く。

それにつられて他の主婦達も寄ってくる。

お昼ご飯の材料でも買いにきてるのか？

そんな事はいいい、俺も早く買わないと売り切れるな。

おっちゃんともう少し話したかったが急がしそうなので買うものだけ買って後にする事にした。

簡単に1200円分ぐらいの野菜を買った。

「おっちゃん、また今度ね」

「おう！ また今度な坊主！」

最後におっちゃんの声を背中が背中に聞こえた。

12時30分、家の中。

案外早く帰って来れたな。

ジャンパーを脱ぎ、俺の部屋の机に向かって投げる。

さて、5時まで何してようかな。

布団の上にあおむけになってこれから5時までの事を考える。
ぐうぐう。

その時、腹の中虫がなった。

そういえばもう1時ぐらいたったな。お昼ご飯にしよう。

そう思うと、むしように腹がすいてきた。

今日は何を食べるとするかな。

布団から立ち上がり部屋をでて廊下を歩き、台所に向かう。

冷蔵庫の中を見る。

冷蔵庫の中は、昨日買った野菜と肉、そして今日買った野菜と肉が大量に入っていた。

今日は晩の鍋パーティーがあるから少なめでいいか。

そう思い、卵と納豆を取り出す。

今日の昼飯は納豆卵かけご飯でいいや。

お茶碗を取り出して卵と納豆を入れ、かきまぜる。

そして納豆についていたからしと醤油を入れ、さらに泡がでるまでまぜる。

そして最後に白いご飯を入れて、さらにまぜてまざれば完成！

これが納豆卵かけご飯の出来上がり！

ふう、いい仕事したぜ！

スプーンを取り出して食べ始める。

納豆卵かけご飯はうまいぜ！。だけど口がべたつくのがダメだな。

どんどんとお茶碗の中のご飯が減っていく。

そしてものの5分で食べ終わる。

さて、食べ終わったし食器洗いをするか。

お茶碗とスプーンを持って流し台へ向かう。

簡単に洗うか。

洗剤を取り出してスポンジに付ける。

それからよく手で揉み泡立てる。

程よい量になったらそれで食器を洗い始める。

数分後、食器は全部洗い終わった。

元々が少ないので楽だったな。さて、後数時間何しようか？

ここまで早く終わるとは少し予想外だった。

「暇だな」

今は自分の部屋で布団の上で寝転がってくつろぐ。
ときどきわくわくしすぎて5時まで待ち遠しいぜ。

そうだ！ 最近買ってまだ読んでなかったラノベでも読もう。

そう思って本棚にある、ブックカバーに包まれた小さめの文庫本を取り出し、読み始めた。

だいたい2時間半位で読み終わるだろう。

そう思い、布団にうつぶせに寝転がり、本を開いた。

内容は、異世界に使い魔として召喚された少年の苦悩の使い魔生活を書かれた本だった。

それから4時25分まで、本を読んでいた。

パーティーが始まる前に（後書き）

今回は少し短くなってしまいました。本当は今回パーティーが始まってるはずなのですがなぜか次話に予定変更になりました。期待してたかたはすいません。してなかった人にもすいません。では、次回のパーティー編であいましょう（何故最終話チツク？

楽しいことはすぐに終わる（前書き）

前回の少し続きかな？w
では本編にどうぞ。

楽しいことはすぐに終わる

「あゝ、面白かった」

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン。
本を読み終えたと同時にチャイムがなった。

しかも連続でなっている。

時刻は4時30分前だった。

こんな早くあいつらが来るはず無いしな。誰だ？

とりあえず玄関に向かう。

その間ずっとチャイムがなっている。

「はいはい。今出ますよ」

途中からもうピピピピピピピピピピと連打されているっぽい。

「うるせえ！ 連打しなくても聞こえてる！」

鍵を開け、玄関のドアを引きながら叫ぶ。ドアの前には大地、神流、勇、留美、川村、鈴原、麗、葛原、葛原の友達一名の順で立っていた。

「やゝ、静間ちゃん。昨日ぶりゝ元気してた？」

大地がいつものように挨拶してきたので鳩尾を殴って沈める。

これで数分は静かだ。そしてこいつ何手に袋持ってた？

「こんばんは！ 静間！ 師匠大丈夫ですか？」

神流が挨拶をしてから大地を心配をした。

あまり心配してるように見えないな。

「よう静間。何鍋するんだ？ 腹を減らしてきてんだぞ」

勇はそうとう腹が減っているようだ。

心なしか少し目つきが怖い。

「静間こんばんはゝ！ 郁もよんじゃった！」

留美はいつもどおり明るい声で挨拶をする。

その明るい声で勇をなだめてほしい。

「こんばんは。留美様にお呼ばれされてきました」

挨拶をしたあとに丁寧なお辞儀をする。

いつの間に留美と仲良くなったんだろう。そして何で今日も着物な
んだろうか？

「こんばんは森下君。なぜか塾の帰りに川村さん捕まってしまった」
鈴原は少し不満そうにしていた。

捕まったなら逃げればいいのに何で逃げないんだろう。

「こんばんはつす」

麗が不良っぽく挨拶をする。

無理に「っす」つけなくていいんじゃないのか？

「こんばんは。静間、君」

いつもの調子で挨拶をする。

もう皆に慣れたのかな？

「こんばんは森下さん。零奈の友達の田津羽芭知琉です」
たつはばちる

葛原の友達の子は田津羽芭知琉と言っらしい。

少し太っているように見えるがそれを気にさせないような何かを持
っている人に見えた。

それは何か分からないけどな。

「あいさつもすんだことだしとっとと入れ。さすがにこの人数が広
場にたまつてると人に迷惑がかかる」

大地達は階段と広場にぎりぎりたまっているため上り下りする人
が上れないのだ。

「わかったよ」

大地を先頭に皆靴を脱いで家の中に入ってくる。

「お前等二人靴そろえろよ」

二人ほど靴が別の靴にのっている。

「何！？ 誰だ！ それは！」

「誰なんです！」

「お前等だ！」

うるさい奴等を家から蹴り出す。

その二人は分かっているとかが大地と神流だ。

さすが弟子というところか同じ事を考えている。

大地はそのまま行動するが神流はあまりしない。

まあだからと言って加減はしないがな。

家から転がるように飛んでいった二人は向かい側の家のドアにあたった。

向かい側は幸い人は住んでいないので苦情は来ないだろう。

他の部屋からの苦情は知らんけどな。

さて、こいつら面倒だけど部屋まで運ばないとな。

そう思い大地と神流の足を引っ張って引きずって行く。

「勇、手伝ってくれ」

「あいよ静間」

勇が出てきて大地の右足を引っ張って行く。

やっぱり引きずるんだなと、思いつつ神流を引きずる。

「台所まで運んでくれ」

「あいよ。でもこれ運んでないよな」

勇が引きずりながら言う。

「別にいいじゃん。大地なんだし」

「そうだなつと、ここでもいいな」

勇が台所の床に大地を片手で持ち上げて投げる。

相変わらず凄い力だ。

「よつと」

神流を滑らすように台所に入れる。

「とりあえず鍋出さないとな。皆来るのもう少し遅いと思ってたよ」

「ごめん、なさい。静間、君」

誰に言ったでもない言葉に思いがけない人から答えが帰ってきた。

「ああ、まあ別にいい。それに葛原が謝る事じゃない。考えたのどうせ大地あたりだろうしな」

それだけ言っただけ俺は洗い場に向かう。

鍋はここだったっけかな？

棚の戸をあけて探す。

なかなか見つからないな。

鍋なんてここ最近食べてなかったし奥のほうか？

2〜3分あさつてやっと思つけた。

「あつたあつた。ガスコンロは確か冷蔵庫の上だったな」

その間皆は話をしたり俺の部屋をあさったりしていた。

あさつてた奴二人は鳩尾に一発づつ重いのを食らわせておとなしくさした。

洗い場から出て鍋を台所の机の上に置き、冷蔵庫の上にあるガスコンロをとる。

これでは適当にしてればいけるだろう。

「とりあえず皆しゅうごう。そして席について」
皆集まってきた。

結構ぎりぎりだなこりや。

俺を合わせて10人も人が台所に集まっている。

あと2人来れば確実に死ぬだろうな。

来ないからいいか。

そして皆は長方形の机に用意された席に着く。

4人、2人、4人、2人で座れるようになってる。

なぜこんなに広いかというとお母さんに聞いてみると、

「この大きさいるような気がして」
だそうだ。

今はそれありがたい。

席は俺が2人座れるところに1人で座り、俺の右側、近くから順に神流、大地、勇、麗と座り、そして左に、零奈、田津羽、留美、鈴原と座っている。

残り一人の川村は俺の向かい側に座っていた。

「とりあえず何鍋にするかだが皆何か食いたい鍋あるか？」
簡単に聞いてみる。

「チゲ鍋」

「俺も師匠と一緒にで」

と、大地と神流。

「寄せ鍋がいいな」

「留美と一緒にの寄せ鍋」

と勇と留美。

「キムチ鍋が食べたい」

「俺もキムチ鍋でいいです」

と、鈴原と麗。

残り三人は、

「べつになんでもいいです」

「おいし、いの、が、いい、な」

「私も零奈と同じです」

と言う。

「何であんたが私と一緒にの選ぶのよ!」

「別にいいじゃないか」

鈴原と麗が言い合いを始めた。

無視しよう。

それよりまず決めなくてはいけないな。

3個に分かれた。

「キムチ無いからキムチ鍋は無理な」

だけどそのうち1個は材料が無いため作れなかった。

鈴原はひどく落ち込んでいた。

そんなに辛い好きなのか？

まあいい、早く進めないとなんだか勇が怖くなってきた。

勇の空腹メーターがどんどん上がっていつてるみたいだ。

「面倒だからジャンケンしろ」

言った直後、大地と留美が前に出てきた。

本当にジャンケンで決めるらしい。

「できるだけ早く負けろよ」

大地にささやく。

「そんなに負けてほしいか！」

いきなり叫びだした。

「うるさい。とっととジャンケンしろ」

俺は大地を殴る。

今回は加減した。

気絶されても面倒だし、のたうちまわられてもうざいだけだ。

「はいはい」

大地は軽い返事をして留美と向き合い、ジャンケンの姿勢になった。どんな姿勢かと言うと、両者腰のところに手を持っていき、その手をもう片方の手でつつみこむように握っているのだ。

「じゃんけんで、ほーい」

二人同時に手を出す。

留美、パー。

大地、グー。

「留美の勝ち。よって鍋は寄せ鍋きまりました」
パチパチパチ。

拍手が少しだけ聞こえてきた。

「材料はこんなもんでいいか」

冷蔵庫から大量の野菜と肉を出した。

洗い場に行き包丁を取り出して、

「さて、作るか」

野菜の皮をむいて適当な大きさに切っていく。

「何か手伝うことあるか？」

勇がやってきた。

「そうだな、だしをたのむ」

「分かった」

鍋に水を入れた後に、ダシ昆布とかを入れ、ガスコンロの上に置いて火をつける。

「どれくらい待てばいいんだ？」

腹を押さえて聞いてくる勇が聞いてくる。

他の皆は適当に話をしている。

「水が沸くまで喋ろうぜ」

そう言つて俺も話しにまざる事にした。

「野菜はもういいのか？」

「もう切り終わったよ」

それから数分、鍋の中の水が沸くまで話した。

グツグツグツグツグツグツ。

「沸いたし食材入れるか」

俺が野菜と肉を鍋の中にバランスよく入れていく。

「うおおおお！ 肉食わせろおおお！」

そして4時50分、大地の絶叫とともに戦いが始まった。

「とりあえずうるさい」

大地を沈める。

そして俺も戦いに参加した。

戦いは凄まじかった。

神流がとろうとした肉を勇が奪うようにとり、奥に行けば鈴原と怜が肉を取り合い争っていた。

醜いな。

そして俺の前で葛原は肉を普通に食べていた。

肉どうやってとってるんだと思ったたら、田津羽凄いスピードで肉をとって葛原の受け皿に入れていた。

友情つて奴か？ つと、あんまり傍観してたら肉がなくなるな。

「つつか皆肉ばっか食ってないで野菜も食えよ」

とりあえず注意してみても全く無意味だった。

まあいいや。俺も腹減ったし食べよう。

箸を鍋に伸ばすもののなかなか肉を取れなかった。

否、取ったと思ったら神流と勇に邪魔をされる。

くそ！ こいつら人がせつかく招いたって言うのにこいつら遠慮無しだな！

そう思っていると、

「ん？」

受け皿に肉が入れられた。

「あげ、る」

声のしたほうに向くと、葛原がこちらを見ていた。

どうやら葛原が入れてくれたみたいだ。

やはり葛原は優しいな。

「ああ、ありがとな」

俺はお礼を言つて肉を食べる。

そんなことを数十分続けていたら野菜と肉が全部切れた。

あんなに買ったのにもう無くなったか。

さつきまで騒がしかったが、食材が切れたと分かって静かになった。

「よし！ 最後はご飯入れて食うぞ！」

俺がそういつて炊飯ジャーの中のご飯を全部鍋の中に入れて少しまぜる。

それから茶碗を取り出してから残り汁を吸ったご飯を入れて配った。

「あゝ食った食った」

大地が茶碗を置いて腹をおさえた。

「本当に遠慮無く食ってたからな」

俺が軽く言う。

「気にするな」

皆が会話に参加する。

「上手かったな」

「ごちそ、うさま、でし、た」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」

皆食べ終わって話始めた。

「よし、片付けるから勇と大地と麗、手伝え」

タイミングを見計らって3人を呼ぶ。

「何で俺が」

「分かった」

「分かったよ」

大地は文句を言ったが後の二人は軽く承知してくれた。
腹いっぱい機嫌がいいのかもしれない。

大地を残し洗い場に行く二人。

「大地、今腹を殴ればどうなるだろうな？」

笑顔で残った大地を脅す。

腹がいっぱいの時に殴られれば相当きついだろう。

「分かった」

大地はすぐに洗い場へと行った。

俺は鍋と茶碗を持って洗い場に行く。

「お前等すげえな。野菜全部消えてしまったじゃないか」

茶碗を洗いながら話しかける。

「静間のせいでおくれたがな」

反省してないもよう。

「悪いな。腹が減りすぎてて人格が変わってしまったようだ」

勇ってこんな危険人物だったんだ。

「すまねえ。鈴原がつかかってきたもんでつい」

リーゼントとスキンヘッドが洗い場に立って食器を洗ってる風景と

いうのは何か変な感じだ。

「大地以外は別にいいさ」

「ひでえ！ 差別か！」

「だってお前反省してないから」

パチーーン！

大地の頭を軽く叩いただけでいい音が鳴った。

「いい音なるな」

もう一回叩こうかと考えてしまった。

「それはそれとして片付けも終わった戻るか」

「どれはどれなんだ？」

麗が聞いてきた。

「気にするな」

台所にもどつて勇が時計を見て、

「うわ！ もう6時かよ。そろそろかえらないとな」

勇の一言で皆帰ると言い出した。

「じゃあまた明日な」

「お邪魔しました。師匠までくださいよ」

「7時50分に明日迎えにくるからそれまでに起きてろよ」

「ばいばい静間」

「そろそろ私も帰ります。お邪魔しました」

「俺も帰るとすつかな」

「私、も、帰る、ね。おじゃま、しまし、た」

「私も帰りますね。零奈を送らなければなりませんから」

「じゃあね、森下君。明日は遅刻しないように」

大地、神流、勇、留美、川村、麗、葛原、田津羽、鈴原の順で皆帰つていった。

皆出て行った後は、さっきまでと違い、静かだった。

家の鍵を閉め、お風呂に入って寝る事にした。

今日はいろいろと疲れたが、その分楽しかった。

こんなに楽しくご飯を食べたのは久しぶりな気がした。

いや、実際久しぶりだった。

俺が中学にあがると同時に兄は高校に通うのを楽しむため高校の近くのアパートに引っ越した。

そしてお母さんは俺と兄の学費と食費を稼ぐためにいろんな仕事をしていたため家にはあまり居なかった。

「あゝ、暗いのは俺には似合わん！ 風呂入ってさっぱりするか」
そしていつものように風呂に入ってから眠りについた。

楽しいことはすぐに終わる（後書き）

多分今回はうだだと思っています。
すいません。

今度から気をつけて書きたいと思っています。
これからも末永くお願いいたします。

黒猫と手紙（前書き）

体育大会やいろいろありまして更新が遅れました。

黒猫と手紙

トテトテトテテ。

そんな効果音とともに黒猫が学校に行く途中の坂道の横の木々の間から出てきた。

鍋パーティーが終わって数日、今日は水曜日だ。

「野良猫か？ めずらしい」

俺が呟く。

「そうめずらしくないだろう。だったここ、学校って言っても山だからな」

その呟きを聞いて大地が答える。

「あゝ、そっかゝ、忘れてたけど学校で山の上にあったな」
すっかり忘れてたな。

「まあ俺もよく忘れるけどな」

同意しながらも大地はしゃがんで猫ののどあたりを指でなでる。

ニャーッン。

うれしそうに鳴いている。

この山、通称木浚塚山。

高さは大体300m。

その頂上に位置する場所にあるのが木浚塚高校。

木浚塚高校に行く道は2つしかない。

それ以外はすべて森で蔽われている。

片方はいつも俺が使っている山道。

山道といって何年も使われているので楽に歩けるし横幅も結構広い。

5人は横に並んで歩ける。

そのかわりすぐ横には木が並んでいる。

前は運よく木と木の間で落ちたので助かった。

そしてもう片方の道はこの道の反対側にある道路。

その道路をつかつて学食のメニューの材料を輸入している。
後は紅牡里姉妹の乗せたリムジンと雪広が乗るリムジンが来るくらいだな。

「なれって恐いな」

俺は今学校に大地と二人で学校に向かっている。

勇と留美は途中で二人の世界に入ってしまったおいてきぼりにした。

「そうだにや」

大地の語尾がおかしくなってる！

ほっぺを猫にすりすりしながら答える大地。

男がこれやると気持ち悪いな。しかもスキンヘッドにサングラスしてるし。

ニヤーン。

そしてこの猫人馴れしてるな。

そんなことはいい、そろそろ行かないと遅刻だ。

「大地、そろそろいくぞ」

俺は学校に向かう。

「わかった」

大地は猫を地面におろしてついてくる。

トテトテトテテ。

その後を猫がついてくる。

大地はそれが気になる様子だ。

関係ないから大地に押し付けるか。関わると面倒なことになりそう
だ。

昔から大地は猫が好きだった。

猫のことになると性格が少しおかしくなる場合がある。

今がその状態だ。

なので俺は関わりたくないので大地を無視して学校に向かう。

大地はついてきてないな。

まあいいや、どうせいつものことだ。

そして俺は学校の校門を過ぎていつものように靴を履き替えるべく靴箱に向かう。

靴箱の戸を開いて俺は啞然とした。

靴箱の中に大変なものが入っていたのだ。

俺はその大変なものをつかむと鞆にいれてトイレの個室に直行した。それから大変なものを鞆から取り出した。

「これって……ラブレター……だよな」

四角い封筒にハート型のシールが張っている。

封筒の左下に俺の名前が書いていた。

それは真正正銘のラブレターだろう。

古い事する奴がいるもんだ。

だがそれに動揺する俺がいるわけだが。

しばらくどうしようか考えてから、

「読まなきゃはじまらん」

そう思い俺はシールをはがし、中の紙を取り出す。

そしてそこに書かれていた内容は衝撃的だった。

『放課後屋上に来てください。』

そしてそこで私と一緒に死んでください。

もし来てくれないなら、私一人で旅立ちます。

森下静間様へ』

.....。

!?

俺なんかしましたか！

どうしようか。

俺が放課後屋上に行ったら心中してくれとせまられて、俺が行かないと俺のせいで人一人の命が消えてしまう。

.....。

めんどくせ〜。

ああ、俺が嫌いなめんどくさそうな雰囲気の流れてるよ。

はあ、この手紙いっそのこといれ間違えたっていわれるほうがいいよ。

でも手紙には俺の名前がしっかりとかいてあるし……。

とりあえず教室に戻ろう。

俺はトイレからでて重い足取りで教室に向かった。

「どうした静間〜。かなりめんどくさそうな事に巻き込まれたみたいなおーラをはっして〜」

大地が話しかけてきた。

しかも俺の心情を軽く言い当てた。

「そんなおーラ俺が出して　て、なんで猫を肩にのして教室にいる？」

大地を見た瞬間に、俺は話題を変えた。

大地は平然と猫を肩にのして席に座っている。

「どうしてもついてくるからつれてきた」

普通に答えている。

クラスのやつ等も別に気にした様子もなくいつもどおり話をしていく。

近くにいた永兎に聞いてみる。

「大地の肩の猫気にならないのか？」

「大地だからな」

そういつて永兎は席に座る。

まあそういえば大地だし気にしても仕方がないな。

もし俺だったら大騒ぎになってるかもな。

俺はそう思いながら大地と話す事にした。

「で、教室に猫つれてきて、笹熊先生怒らないか？」

「なんとかなるだろう」

そう言つて大地はサングラスを怪しげに光らせる。

それと一緒に頭も光る。

これは面白い事になりそうだな。

「それでその猫どうするんだ？」

「俺が飼う事にした」

「まあがんばれや。俺は俺のことで精一杯だから」

話を終わらせて席につく。

大地と話していると今思っていることが少し小さく思えてくる。

人の命がかかっているから別に小さくはないがな。

まあ大分楽になった。

なるようになるだろうな。

そう思いながらホームルームまで本を読む事にした。

黒猫と手紙（後書き）

またしてすいませんがかなり今回は短くなってしまいました。
いつもの半分です。

さあ、これからどうなって行くのかは、俺にも予測できません。（あ
まゝこれから末永くお付き合いください。

感想どしどし待ってます

恐いよ……

本を数ページめくったところにチャイムが聞こえて来た。

それと同時に担任が入ってくる。

今日はここまでか。

俺は本を閉じて机の中に入れた。

そして騒いでいた奴等は皆一瞬にして喋るのをやめ、席に着いた。

教卓の前に立って、教室を軽く見渡す姫坂先生、そしてすぐに教卓前の席の大地の格好と方に乗っかっている者に気がついた。

「古寺、サングラスをはずせ。そして教室に猫を入れるな」

先生が大地の事を注意する。

「いやです！ サングラスは俺の命です！ そして猫も！」

「いつからお前の命はサングラスと猫にやどったんだよ！」

大地の力いっぱいの否定。そしてそれに突っ込まずにいられない俺だった。

「まあいいじゃないか。気にするな」

ポン。

「お前が言っんじゃない」

姫坂先生が名簿で叩く。

「まあ笹熊先生もサングラスかけてるしいいか」

大地の事はそれで終わりだった。

後は簡単な話をしてホームルームは終わった。

「その猫ずっと肩に乗せてるのか？」

ホームルーム中ずっと猫は肩に乗っていた。

「そだぜ」

大地は机に突っ伏している。

必然的に体が斜めに傾くが肩に乗っている猫はうまいことバランスをとっている。

どうしてそこまで肩にこだわるんだろうか。

「名前はどうするんだ？」

「それはもうきまつてるぜ！」

「どんなのだ？」

大地は自信満々そうに胸を張ってその名前を口にした。

「黒いからクロ！」

「そのまんまじゃねえか！」

頭を両方向からつかみ思いつきリシェイクした。

「やめろっ、はっくっ」

「吐くがいい！」

さらにスピードを上げて回す。

「ぎゃっ、やめろっ、まじで吐くからっ、冗談だから」

最後は手を振りほどいていた。

「冗談だったら本当の名前は？」

「メフィだよ。そんなクロなんて名前付けるわけじゃないじゃないか！」
猫を、もといメフィをなでる。

「へいへい」

俺は軽く手を振って席に戻る。

そして朝の手紙の事を思い出してしまった。

そして俺は机でうなだれる。

「どうかなさいましたか？ 森下様」

隣の席の郁が話しかけてきた。

「別に何も無いよ」

郁に言うとなんだが大騒ぎになりそうだ。

「そうですか。ラブレターをもらったはいいがその内容がかなりシ
ョッキングなことだった、見たいな顔してますのに」

「なっとなっ、なんでそのことを！？」

しまった！？

俺の心を読んだんじゃないかというくらい正確に言い当てられ、お
もわずくちばしってしまった。

「正解みたいですネ」

にやり。

郁が不敵に笑う。

「その面白そうなことに私を混ぜてくださいよ」

そしてまた不敵に笑う。

こ、恐い。

なんだか相当やばいことになって来たな。逃げるか？

そう考えていると、

「逃げようとしても無駄ですよ森下様」

よ、読まれてる。どうしよう。

『キーンカーンカーン キーンカーンカーンカーン』

どうするべきか考えているとチャイムが鳴った。

「チャイムが鳴ったしこの話はこれで終わりだな」

そう言つて教科書を出そうとすると、

「逃がしませんよ」

ひっ。

間抜けな声が喉まで来たが何とかこらえた。

うん！ もう寝たふりして逃げよう！

教科書を出すだけ出して俺は寝ることにした。

恐いよ……（後書き）

次回からはもう少し長くできますようにがんばります！（15話で
もいた記憶が

まあこれからも応援よろしく願いします！

ついでにネタがつまったら「黒猫の悪魔」を更新しますんで、そ
れをみて今つまってるから更新しないんだな〜っとでも思ってくだ
さい。

そして祝！ アクセス数のユニーク5600人！

超感激です！

ではもう一回！

これからもよろしく願いしますね！

保健室に悪魔

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

「森下様、森下様おきてください」

授業が終わってからすぐ体を揺らして郁が俺を起こそうとしている。だが俺は狸寝入りで無視をする。

「ふふふ、狸寝入りで逃げようというのですか」
ッ。

背中に悪寒が走り抜けた。

なんかこれやべえな。

がさこそ、がさこそ。

隣から靴か何かをあさる音が聞こえてきた。

薄目で見ようとするが今思えば郁の席は反対なので見えるわけがない。

これは今の内に逃げるべきだな。

善は急げと言うことで俺は机を倒さんばかりの勢いで立ち上がって出口に向かって全力で走る。

そして教室から出てこれで逃げ切っただろうと思い後ろを見ようと
思った直後、また背中に悪寒が走る。

今振り返ったら地獄が見える。

俺はそう思い、限界を超える速度で校舎を走り抜けた。

そして俺は保健室に逃げ込んだ。

チャイムも聞こえてきた。

「どーうしーたのー、もーりしーたくーん？ 授業はじまるよー」
保健室に入るとなんだか気が抜ける声でしゃべりかけられた。

話しかけられたほうを見ると、そこには小学生低学年かと思える背
丈の少女が白衣を着て笑顔で立っていた。

白衣は大きいためかなり引きずっている。

そして手は袖から出ていなかった。

「いや、はあはあ、何でも、はあはあ、ありま、はあ、せん」

「あゝら、そんなにはあはあ言つてゝ、私によくじょゝしちゃったゝ？」

少女はそう言つて口に手を当てて笑う。

「そんなことありませんから猫小先生」

呼吸はだいぶ落ち着いたのでとりあえず訂正をする。

そして目の前に立つ小学生低学年位の少女は、実際この学校の保健の先生である。

名は柳原猫小。
やなぎはらねここ

年齢不明。

本人に聞いて見たが、

「女性にゝ年をゝ聞くもんじゃゝないよゝ」
だ、そうだ。

初めて会つた人はまず先生とは思わないだろう。

猫小先生は今年この高校の保健の先生になったばかりだ。

つまり新任教師である。

初めに始業式で猫小先生を見たときは、なんでこんなことに白衣を子供がいるんだらうかと思つていると、校長先生の紹介で今年から赴任してきた保健医だと聞かされたときは皆ドッキリじゃないか
としばらく噂になった、らしい。

俺は始業式遅刻でいなかったからその後聞いた。

そうした噂は最近はなくなつてきて、皆普通に接している。

まあ飴とかあげたり猫ちゃんと呼んだりすることが普通なら普通なんだらうけどな。

ちなみに俺の中では普通だ。

「疲れているので今日もベッド借りますね」

俺はそう言つとカーテンの奥にあるベッドの下に行く。

「はいはゝい」

猫小先生は軽く返事をして椅子に座る。

「んゝっしょ、んゝっしょ」

椅子の高さは先生の腰より少し上にあるので猫小先生の身長じゃあよじ登るしかない。

椅子の高さ下げればいいのに。

思うだけ思っただけ俺は布団の中で眠りに落ちる。

いつものように夢には少女が出てきた。

だけど今回は、いつもと、少しちがった。

いつも泣いている少女は、今回は、笑っていた。

その笑顔は、ひまわりのようなまぶしい笑顔だった。

そして少女は、口を動かした。

「

」

だが、何を言っているのかまったく分からなかった。

口は動かしているのだが、声が聞こえてこないのだ。

そしてだんだんと少女がかすんでくる。

ああ、そろそろさめるんだな。

俺はそう実感した。

俺そつと目を開けた。

そしてそこには、郁の顔がドアップで見えた。

その顔には人に恐怖を思わせるような笑顔があった。

「うおわっ」

俺は変な声を出した。

ぎりぎり顔を浮かさずにすんだ。

浮かしていたら多分ファーストキスを奪われていたかもしれないな。

ちなみに郁は俺のお腹あたりに座っている。

「さて、話を教えてください森下様」

めんどくせえなあ。

話してもめんどくせえし、話さなくてもめんどくせえ事になりそう
だ。

ええい、もう言っ飛ばしてしまえ。

そのほうが楽になれる。

俺はそう思い手紙のことを郁に話した。
乗られた状態で。

保健室に悪魔（後書き）

なんだか最初から最後までうだうだだったような気がします。
そして短いという最悪ですね。

まあ感想とか指摘とかどんどん送ってください！
まってますにゃ！

ひどい！

話終わった後郁は、

「がんばってください」

それだけ言うと俺から降りて保健室を出て行くとする。

郁が言ったことを理解するのに数秒かった。

「それだけかよ!？」

理解した瞬間に叫んでしまった。

郁は振り返り、

「森下様の口から直接聞きたかっただけですから」

と、だけ言って出て行った。

なんてひどい奴だ！ 最後にフッフと何かを企んでいるんじゃないかと不安になるような笑いをして出て行きやがった。

後郁のせいでなんか重大な夢を見たような気がするんだが思い出せない。

面倒なのでこれ以上考えないようにしよう。

二度寝をしようと布団にもぐると、

「ん？」

なんだか足元に違和感がある。

暖かいし微妙に動いてるような。

さつきは郁に気をとられていて気がつかなかったな。

布団を剥ぎ取ってみた。

すゝ、すゝ。

そこには猫子先生が体を丸めて寝ていた。

さつきからいらないと思ったたらこんなところで寝ていたのか。

そしてなぜ俺の寝てるベッドなんだ？

寒いのか、俺がはがした布団を探りだしてかぶる。

なんだかこうしてみると子猫みたいだなと、和んではいる場合ではないな。

とりあえず……、どうしよう。

起こしたら面倒そうだ。

このままにしておこう。

そう思っただけ俺はベッドから降りて猫小先生に布団をかけなおす。

よくこういうシーンで誰かが入ってくるって事あるけどそんなイベントはない様だ。

まあ当然だろう。

今は授業中なわけだし。

それだけ思っただけ俺は保健室を後にする。

保健室を出ると同時にチャイムが鳴った。

そういえば今って何時間目だったっけ？

そう思い携帯を取り出し、ディスプレイをしてみるものの時間が分からなかった。

なぜなら、

「充電忘れてた」

仕方がないので携帯をポケットにしまう。

そう言えば保健室に時計ってあったよな。

保健室に入ろうとしたその時、

ドドドドドドドドド。

遠くから地響きが聞こえてくる。

それと一緒に、

「焼きそばパンは俺のものだあああああ！」

「いいや俺のものだあああああ！」

などといういろんな声が聞こえてくる。

ああ、もう昼休みか。

なら図書室に行くかな。

時間が分かったし目的地は決まったので、こんどこそ本当に保健室を後にし、図書室に向かうことにした。

昼飯はどうするかだつて？

そんなもん一食抜いたくらいじゃしなんだろ。

靴箱に靴を入れて俺は図書室に入る。

今日は図書委員の受付の係りはちゃんと来てるな。

カウンターで弁当を食べているが。

新しい本でも借りるか。

制服のポケットから本を取り出す。

朝読んでいた本とは別の本だ。

本は常に2冊持ち歩いてるのだ！

まあ意味はないがな。

そして面白そうな本を探していると「手紙」という題名の本を見つけた。

あゝ、そう言えばもう少しで放課後じゃないか。

何も考えてないぞ。

いや、まあ一日中ねてたから当たり前なんだが。

一瞬足から力が抜けて危なく膝を地面につきかけた。

あゝ、面白そうな本があるゝ。

目の前には「手紙撲滅計画！」と題名が見えた。

それを見て現実逃避に走る俺であった。

ひどい！（後書き）

大地のモデルのリア友がこちらで小説を書き始めました。
パチパチパチパチ。

作者名は豊、作品名は【六等星】ですね。

そしてなんと！

この木浚塚！恋愛学園のアクセス数が2万突破しました。

パチパチパチパチ！

うれしいことですね。

こんなうだうだした小説がこんなに人気が出るとは、お兄さんびつくりだ！

まあこれからもお願いしますにや〜w

なぜにー！

『キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン』

現実逃避は無駄に終わり、ホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「チャイムも鳴ったし、今日はこれで解散。気をつけてかえりなさいよ〜」

「は〜い」

姫坂先生がそれだけ言い残して教室を出る。

その後、前と後ろの扉に別れて部活組と帰宅組が教室から出て行く。前は帰宅組、後ろは部活組と、決められた訳ではないのに、いつの間になつていた。

くだらないことを考えて、手紙のことを頭の中から消そうとする。だけど既に放課後である。

そんなことしても意味はない。

「はあ、行くしかないか」

俺は席を立ち、屋上に向かう。

ああ、階段が長い。

屋上に続く階段がやたらと長く思えるのはこの気持ちのせいだろう。はあ、まだつかないのか。

でもこのままつかないのもいいな〜。

などと考えて階段を上る。

だがなかなか屋上につかない。

それ以前におどりばにすらたどりつかない。

階段を上る足を見ると、

ウオ~~~~~ン。

機械が動く音とともに階段がエスカレーターみたいになっている。

.....。

「なんじゃああああこりゃああああああー！」

どこかで聞いたことがあるような台詞を叫んでみた。
叫んでる間もどんと下がっていく。

「エスカレーターですよ」

後ろから声が聞こえていた。

振り返ると、そこには眼鏡の位置を直している一真がいた。

「いやいやいやいや、なんでこんなところにエスカレーターがあるんだよ」

「のりで作ってみました。入学が決まったときに」

「何のりで作ってんだよ！　しかも学校にこんなもん作っていいのかよ！」

とりあえずエスカレーターを歩き、下がらないようにする。

「寄付金とワイ……おっと、余計なことまで言いかけた」

「今賄賂って言おうとしなかったか！」

「そこは気にしてはいけないことさ」

「いや！　気にするから！」

「んじゃあそう言う事で」

一真は階段を下りて行った。

何のためにこのエスカレーターを作ったのか聞けなかったな。
てかエスカレーター止めてけよ！

しかたがないのでエスカレーターを走って上る。

今頃だけどなんで下りなんだろうか。

ここだけかと思ったら次の階段もエスカレーター化していた。

はあ、はあ、なんか2個目スピード少し速かったぞ！

全力で走って何とか屋上の扉の前に着いた。

あいつ何考えて学校にエスカレーターなんてつけたんだよ本当に！
それにしても勢いでここまで来たがここからどうしよう……。
少し考えるが、

「考えてもしょうがない。もういつっちゃうか」
ガチャン。

扉に手をかけて開ける。

なぜここに！（後書き）

最近どんどんと短くなってる気がするが……。
気にしないでおこう。
君達も気にするな！

参上！

屋上に出ると、身長160cmくらいの少女が日傘をさし、立っていた。

「来てくれたんですね。うれしいです」

少女はこちらを向くとそう言った。

腕は細く、つかんで少し力を入れたら折れてしまいそうで、肌の色は白く、日の光にあたっているとすぐにでも倒れてしまいそうな印象をうけた。

そして紙は黒く、余計に肌の白さを浮かび上がらせていた。

じつとこちらを見る目の色は、吸い込まれそうになる程赤い色をしていた。

そして、どこか懐かしい感じがした。

「あ、あなたはだれだ？　そして何でこんな手紙を俺の靴箱に入れたんだ？」

動揺しながらも俺は目の前の少女に手紙を出して問う。

「やはり、おぼえていませんか。さすがに11年も前のことでものね」

悲しそうな顔をし、そして今にも泣き出しそうな声で喋る。

11年前？　確か最近夢でそのあたりの事見た記憶が……。やっぱり思い出せない。

思い出そうとするとなぜかひどい頭痛が。

「思い出せんか？　しーくん」

しーくんと呼ばれた瞬間頭の中でカチンっと、スイッチが切り替わるような音がした。

それと同時に閉じ込められてた記憶が流れてくる。

11年前の記憶と友に。

「湯奈ちゃん」

そして俺はなんとなく出てきた名前を口にした。

「思い出してくれたんですね！」

湯奈ちゃんと呼んだ瞬間、少女の表情は見る見るうちに明るくなった。

「ああ、思い出したよ。湯奈ちゃん」

「うれしい！」

そして湯奈ちゃんは俺に走りよってきて勢いよく抱きついてきた。

「って、何勝手な妄想して呟いてくれてるんじゃないあ！ 湯奈姉！」

「はっ、しーくんが遅いから妄想しちゃった」

さっきのことは全て妄想である。

あのまま行けば間違いなく連載終わってたな。

危ないところである。

俺が屋上のドアを開けると、そこには日傘を差してぶつぶつと変なことを呟いている湯奈姉が立っていた。

ゆゆみゆな
湯由美湯奈。

この女は俺が4歳のときに引越しをしたお隣さんだ。

そして俺より1歳年上である。

つまり幼馴染で隣のお姉さん。

と、言うことになる。

最悪な幼馴染だ。

性格も最悪だ。

小さい頃近所に同じくらいの子がいなかったのでよく遊んでいたのだが、とりあえず恐い。

だって縄跳びで縛ってどこから取り出した鞭で叩いてくるは、お馬さんゴツコとか言って背中に乗って早く走らないと乗馬用の鞭で叩いてくると言う凄いサ。つぷりを見せられたのだ。

なぜ乗馬用の鞭を持つてるかというと、一応金持ちだからだ。

そして俺が4歳になったときに引越しをして、俺は平和な日常を掴み取ると同時に俺の中から湯奈姉の記憶を完全に消した。

だがさっきの妄想での独り言を聞いて思い出した。

昔のトラウマを……。

まあ今はそんなことは置いておこう。

「湯奈姉！ この手紙なんだよ！」

とりあえず正体は分かったので恐がる必要もない！ わけではない

……。

「のりで書いてみちゃった。しーくんってなんだか無駄に責任感あるじゃない それから年上に向かってその喋り方はなにかない？」

「はい、すいませんでした」

のりってなんだよ！ とツツコミたいが、とりあえず謝った。

だってなんか最後のほう恐かったんだもん。

「今回は許すけど、今度したら許しませんから」

「は、はい！ 今度から気をつけます！」

もう半泣き気味に謝った。

何で俺がこんな目に……。

最近こんなことが多いよ。

参上！（後書き）

さて、最近リレー小説書いてみたいな〜っと思ってるのですが誰と書こうかと思っていますよ。

誰かこの作者でやってもいいという人は俺にメッセージください！
お願いします！

後評価と感想もお待ちしております。

リア友の豊は「六等星」打ち切り（？）

新しく「ツルツぱげ！」を描いております。

そちらも応援よろしくですにゃ〜。

恐怖の姉

「はぁ、学校もこれで安全じゃなくなった」

「どうした静間く。今にも自殺しそうな顔で溜息なんてついて」
大地が話しかけてくる。

湯奈姉と別れた後、教室に荷物を取りに来ていた。
教室には大地がまだ残っていた。

「めんどくさい人がいたんだ」

大地が興味津々で聞いてくる。

「ふむふむ、それは誰だ？」

「湯奈姉……」

「それは湯由美湯奈先輩のことか？」

「ああ、そうだ」

「あと先輩じゃなくて生徒会長だけだな」

「ああ、そう……ってええ！？ 会長！？」

危なくスルーするところだった。

今生徒会長って言ったよな？

「ああ、本当は始業式の生徒会長の挨拶があつたんだ」

「そんなのあつたっけ！？」

「けど、俺の事件と紅牡里姉妹の登場で時間が潰れて無くなった」

「お前のせいかな！」

大地の顔に向かって右ストレートが炸裂する。

それを大地は手がほつぺたに触れた瞬間に体ごと回転して威力を逃がす。

無駄な身体能力だな。

そして回転が止まり、

「うえゝ、はきそゝ」

自爆した。

「まあそれは置いておこう。何でそのこと話さなかった！」

「だって静間は聞いてこなかったじゃないか。それにあの始業式の後に湯由美会長が会いに来て、「君はしーくんの友達なの？」って聞かれて、はい、て答えたら口止めされたんだよ」

大地はふらつきながら答える。

あ、机に足打った。

足押さえてかかんてる。

「そうだったのか？」

「そうなんだ」

「その言い方むかつくな」

とりあえずかんだままの大地に蹴りを入れる。

「あうち」

ドス、ゴス、ガツシャーン。

軽く蹴っただけなのにオーバリアクションで転がって椅子と机を倒して、最後にドアに当たりとまった。

当たったドアはわくから外れて倒れた。

「あゝあ、しゝらない」

俺は鞆を持って教室から出る。

大地も鞆を取って机を漁る。

すると机の中からメファイが出てきた。

「机の中に入れてんなよ」

「いいじゃないか」

大地は頭の上にメファイを乗せる。

スキンヘッドだからするんじゃないか？ と、疑問に思うが口に

出さないでおく。

「これどうするんだ？」

「後で何とかさせとく」

大地が変なことを口走った。

「させとく？」

「あ、間違えた。しとくだしとく」

少し大地の言葉に疑問に思えたがこれ以上詮索しないでおこう。

そして小声で大地が危ない危ないと言った事も聞かなかったことにしよう。

湯奈姉の事もあやふやになり、いつも通りの会話をして昇降口に向かう。

そして靴を履き替えていると、

「遅いよしーくん！」

特徴的な呼び方で俺を呼ぶ湯奈姉の姿が目に入ってきた。

「何で湯奈姉がいるんだよ！　そしてしーくんって呼ぶな！」

「だから年上にその口のききかたは何かな？」

殺気をチラつかせながら俺の対応をする。

「久しぶりですね。湯由美会長」

「久しぶりね古寺君」

そして湯奈姉と大地は軽く挨拶をする。

「お前恐くないのか？」

小声で大地に話しかける。

「なにが？」

大地も小声で答えてくる。

「いや、今俺に向かって湯奈姉が言った事だよ」

「別に恐くはないぞ」

「すげえな」

大地と話していると、

「な～にこそそこそはなしているのかな？」

湯奈姉の声が後ろから聞こえてきた。

「！！！！」

俺は腰が抜けかけた。

何でかって？

だってさっきまで昇降口の入り口にいたのにいつの間にか正反対の

俺の後ろにいるんだぜ。

どうやって移動したんだよ！　と、言いたくなる。

言った瞬間殺されるがな。

「いや、何でもありません」

何とか体勢を立て直してできるだけ敬語で湯奈姉の質問に答える。

「あのですね。静間が湯由美生」

大地がとんでもない事を口走ろうとしたので口を塞いで黙らせる。

「私がどうかしたのか？」

「いや、どうもいません」

「ならいい、今日はしーくんと一緒に帰ろうと思っただけどう？」

「憤んでお断りします」

「分かった」

おお、分かってくれた！

怒られると思っただよ。

「つまり一緒に帰ろうってことね！」

「分かっただいじゃないか！」

思わずいつも通りツツコンでしまった。

「しーくん、そんなに私と帰りたくないの？」

懐かしい鞭を鞆から取り出して聞いてくる。

その鞭はいつも持ち歩いてるのか！

恐怖の姉（後書き）

ユニークアクセス数もとうとう8000人を超えましたにや！
これからも皆さんよろしくおねがいしますにや〜。

リレー小説の参加者募集中ですにや〜。（まだ一人もいません
感想とか評価もお願いします〜）。

鬼は居つき嵐が迫る

ふう、今日はいろいろあったな。

風呂に入った後、遠い目をしながらコーヒー牛乳（砂糖大量入り）を飲む。

かあ、甘。

やはり風呂上りはコーヒー牛乳だな。

おっさんくさいことを思いながらコーヒー牛乳を飲む。

今日はしんどかったな。

色々と面倒なことがあったからな。

あの後もしんどかった。

湯奈姉が隣に住んでるのはさすがに焦った。

いつから住んでるのかと聞くと、

「去年からよ」

と、素で返された。

今まで会わなかったことが不思議で仕方がない。

しかも湯奈姉の家は結構なお金持ちのはずだったのにこんなところに住んでるとは夢にも思わなかったのだ。

その前に記憶から完全に抹消してただけだな。

湯奈姉の方は一応知ってたらしいが学校や生徒会の仕事で色々忙しく会うことがなかったそうだ。

それはそれで俺の平穏な日常が守られていたからいいのだがな。

今はもうだいぶおさまって暇になってきたそうだ。

それで暇つぶしついでに俺に手紙をよこして色々遊んでたそうだ。聞いた話では大地も一枚かんでいたらしい。

俺は大地を殴ろうとしたがひらりと避けられ湯奈姉に捕まり家まで連行された。

しかも片手だけでだ。

なぜ片手だけなのかは日に弱く室内以外では日傘を差しているから

だ。

それでも俺の動きを封じるだけの力はあるらしく動けなかった。ついでに息もできなくて一瞬マジで臨死体験をしたな。

三途の川をかなり久々に見たものだ。

そんなことはどうでもいい。

どうやら湯奈姉はお母さんに俺を任されたらしく家の鍵を持っている。

「明日から毎朝起こしてあげるからね。フフフフ」

そう俺の家の鍵を見せながらドアの前で黒い笑みを浮かべこちらを見、手を振っていた。

新たなトラウマを植えつけられたような気がしてならなかった。

あの後家に入ってからしばらく本気で鍵屋に電話をしようか考えていたからな。

結局変えてもすぐに合鍵を作られると言う結論が出た。

そして今にいたる。

どういたるのかはもう聞かないでくれ。

コーヒー牛乳も飲み終わったしもう寝るか。

メールが1通着ていたが今日はもうだるいので寝ることにした。

そしてこの1通はこれからの生活に大きく影響を与えるとは知るよしもなかった。

鬼は居つき嵐が迫る（後書き）

リレー小説始めます。

名前は桃内&豊です。

まだ始まってませんがもう少しで更新！ 予定です〜w
気が向いたら呼んでくださいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3907c/>

木浚塚！恋愛学園

2010年10月25日02時27分発行